

福岡市埋蔵文化財調査報告書686集

松木田遺跡群 2

第3次調査下層（縄文時代早期）遺物編

2001

福岡市教育委員会

松木田遺跡群 2

第3次調査下層（縄文時代早期）遺物編

2001

福岡市教育委員会

序

松木田遺跡は平成8年度に発掘を行った遺跡で、翌9年度に発掘報告書を刊行いたしました。調査地内からは、弥生時代から古墳時代の住居跡群が発見されました。これらの遺構が発見された面のさらに1m下からは、市内域の沖積平野では初めて縄文時代早期のまとまった遺物が出土し、その出土点数は5000点を超える量でした。調査報告書では、弥生・古墳時代の遺構については正式な報告が行えたものの、縄文時代の遺構・遺物については、時間的な関係から概要の報告しかできませんでした。

今回、縄文時代早期編として新たに報告書を刊行することができました。今まで出土例があまりない土器群と100点を超える石鏃が出土しており、大変興味ある内容となっております。

報告書の刊行にあたりまして、新たな予算措置をしていただいた福岡市土木局を始め、多くの方々のご指導・ご協力を賜りました。お礼申し上げるとともに、本書が広く活用されることを願っています。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例　　言

- 1 本書は平成8年度に調査を行った松木田遺跡群第3次調査の第2冊目の報告書である。前報告書（福岡市埋蔵文化財調査報告書第578集「松木田遺跡群」1998=以下、前書）では、第2次調査と第3次調査上層の本報告及び下層（縄文時代早期）の概要報告を行った。本書は第3次調査下層の本報告であるが、検出遺構については前書でほとんど網羅しているため、本書では概要及び主要遺構の図と写真のみを掲載した。また本調査に関する経緯・調査組織などの詳細は前書に掲載している。
 - 2 出土遺物の一部は前書に掲載したが、比較・検討のため、かつ出土遺物掲載の一貫性を割るために、本書に再録した。
 - 3 掲載した遺物は、土器が1番から番号を振り、石器は101番から番号を振った。挿図と図版の遺物の番号は同じ番号を振った。
 - 4 本書に掲載した遺物の実測は、上器；米倉秀紀、石器；米倉、横山邦継、星野忠美、藤祥子、山口朱美が行った。石器の同定等に関して、小畑弘己氏（熊本大学）、山口謙治氏（福岡市）の多大なご協力を得た。
 - 5 本書に掲載した遺物の写真は米倉が行った。
 - 6 本書に掲載した図の製図・拓本は米倉・山口朱美が行った。
 - 7 本書の編集・執筆は米倉が行った。
 - 8 本書に掲載した遺物・記録類は収蔵整理要項に則り、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
 - 9 放射性炭素年代は3点実施した。結果は下記のとおりである。
 - ① SX101堆積物- β 線計数法-8540±70（補正後）
 - ② SX109堆積物- β 線計数法-8590±70（補正後）
 - ③ 最下層（区不明）-AMS法-4440±40（補正後）
- ※③については区が不明なため、包含層から外れている可能性もある。

本文目次

はじめに	1
1 繩文時代の遺跡の立地と層序	1
(1) 遺跡の立地	1
(2) 層序	2
2 繩文時代包含層の調査経過	3
3 検出遺構の概要と遺物の出土状況	3
4 出土遺物	4
(1) 土器	4
(2) 石器	14
5 遺物の出土状況	29
(1) 全体の出土状況及び遺構内出土状況	29
(2) 土器の分布状況	30
(3) 石器の分布	32
(4) 小結	32
6 まとめ	35
おわりに	38

図版目次

図版 1 主要検出遺構・出土土器 1	44
図版 2 出土土器 2	45
図版 3 出土土器 3	46
図版 4 出土土器 4	47
図版 5 出土石器 1 (石器)	48
図版 6 出土石器 2 (石器・ポイント)	49
図版 7 出土石器 3 (スクレイパー・コア他)	50

表目次

表 1 グリッド別出土土器点数	33
表 2 グリッド別出土土器面積	33
表 3 グリッド別出土口縁部・底部数	33
表 4 グリッド別剥片出土数	34
表 5 グリッド別石器数	34
表 6 グリッド別欠損石器数	34
表 7 掲載上器一覧	39
表 8 出土石器一覧	41
表 9 掲載石器一覧 (石器を除く)	43

挿図目次

図1 福岡周辺主要縄文時代初期遺跡	1
図2 松木田遺跡周辺地質図	2
図3 上層断面図 (1/40)	折込1
図4 遺構配置図 (1/200) 及び主要遺構図 (1/20)	折込2
図5 B-3区遺物出土状況 (1/20)	3
図6 出土土器実測図1 (1/3)	5
図7 出土土器実測図2 (1/3)	7
図8 出土土器実測図3 (1/3)	8
図9 出土土器実測図4 (1/3)	9
図10 出土土器実測図5 (1/3)	11
図11 出土土器実測図6 (1/3)	13
図12 出土石器実測図1 [石鏃1] (1/1)	15
図13 出土石器実測図2 [石鏃2] (1/1)	16
図14 出土石器実測図3 [石鏃3] (1/1)	17
図15 出土石器実測図4 [石鏃4] (1/1)	19
図16 出土石器実測図5 [石鏃5] (1/1)	20
図17 出土石器実測図6 [ポイント] (1/1)	23
図18 出土石器実測図7 [ポイント・スクレイバー] (1/1)	24
図19 出土石器実測図8 [スクレイバー] (1/1)	25
図20 出土石器実測図9 [コア・使用痕・加工痕ある剥片] (1/1)	27
図21 出土石器実測図10 [磨石・石皿] (1/3, 1/4)	28
図22 B-3区検出遺構と遺物出土ドット (1/30)	30
図23 E-7区周辺遺構と遺物出土ドット (1/30)	31

はじめに

松木田遺跡は福岡市早良区早良3丁目一帯にある。当遺跡内を通る県道内野次郎丸弥生線の付け替工事のため、当遺跡の調査を始めたのは1996年10月1日であった。調査当初は弥生時代以降の遺構・遺物のみの予定であったが、調査途中で、弥生時代の面の1.5m下で縄文時代の遺物包含層を検出した。包含層からは5000点を越す遺物と石組炉等の遺構を検出した。発掘調査については当初予定を2ヶ月以上延ばし、追加の予算措置もできたものの、翌年1997年度に予定していた報告書作成については、縄文時代分の整理が間に合わないため、整理・報告書の縁り延べを原因者に依頼したが、すでに予算措置が終了し、今後の見通しもわからないため、同年度に上層の報告と下層（縄文文化層）の概要報告を行った（前書）。今回新たに予算措置をすることができたので、下層文化層分の報告を行うものである。なお詳細な調査原因・調査組織等は前書に記したとおりである。

1 縄文時代の遺跡の立地と層序

（1）遺跡の立地

松木田遺跡は、早良平野の奥部、室見側の西岸近くに位置する。遺跡のマクロ的位置については前回記述しており、ここではミクロ的立地について見てみる。調査区周辺は、現在は室見川に向かって下っていく棚田状を呈する水田である。ただし調査地点はその南北両側に比して若干高く、その高まりは調査区内南半から北北東へ延び、やがて川の手前で大きく落ちる。第3次調査の上層文化層と下層文化層の間には大槻を多く含む厚さ1~1.5mに及ぶ砂礫層があり、上記の北北東へ延びる高まりは、この土石流によるものと思われる。つまり調査区の南西あたりから北東に向けて、下層文化層以

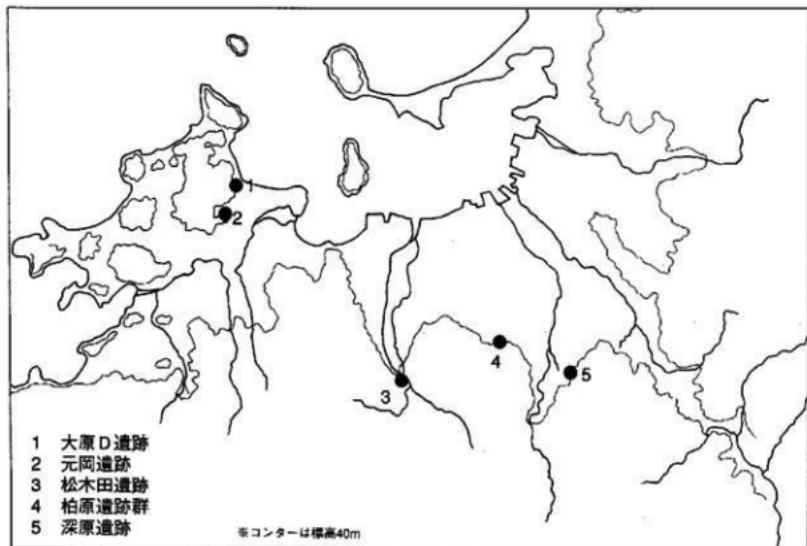


図1 福岡周辺主要縄文時代初期遺跡

降、上層文化層以前に土石流が起きたものと推察される。これは福岡市土地分類細部調査報告書にある地図が示すとおりである。この土石流のお陰で下層が保存されたと言える。

福岡市では近年縄文時代初期の遺跡の発見が相次いでいる。以前から知られていたのは南区にある柏原遺跡である。柏原遺跡は早良平野と福岡平野を分ける櫛井川の上流、油山の北麓にある。石組炉が多数発見されたF遺跡、住居址状の遺構群のあるK遺跡、いわゆる柏原式の出土したE遺跡などがあり、F遺跡は一見岩陰状の立地である。西区の糸島半島には大原D遺跡と元岡遺跡がある。大原D遺跡は現海岸近くの遺跡で、草創期の条痕文土器が山土し焼失家屋のある第14地点、押型文・無文土器のある第16地点、柏原式土器が出土した第15地点がある。第14地点はすぐ背後に急斜面がある岩陰状の立地である。元岡遺跡はやはり岩陰状の立地で、条痕文土器・撫糸文土器・押型文土器が層を進えて出土しており、このうち撫糸文土器は当遺跡で出土したものと極めて似た土器である。

(2) 層序(図3)

層序については、前号でも述べたが再度簡潔に記す。全体の層序は場所によってかなり異なっているが、基本的な層序は下記のように大別できる。

第1層：灰色粘質土(耕作上) 厚さ20~30cm

第2層：黄褐色土(床土) 厚さ15cm

第3層：黒褐色シルト 厚さ0~15cm 平安時代包含層

第4層：黄色砂礫 厚さ60~80cm

上面が上層文化層(弥生時代前期以降の遺構)の遺構面。砂と大礫の混合層。

第5層：黄灰色シルト 厚さ5~40cm

場所により色調が異なるシルト層。4層の上面からこの層をぶち抜いて大穴が数基あいており、縄文時代の包含層も突き抜けているが、人工的なものではない。

第6層：黒褐色シルト 中心部厚さ30~40cm 縄文時代の包含層

中心部は黒色で、周辺部は灰褐色や明褐色を

呈する。

第7層：黄白色シルト

無遺物層。包含層がある部分にしかない。包含層の南北両側には谷が入るため、その両谷間の鞍部状の地形をこの砂層が形成している。

縄文時代の遺物包含層は遺跡の南端から調査区中央部近くまで検出し、調査区北側にはなかった。包含層の下は黄色砂がやや厚く入り、その下は砂とシルトの互層になっている。包含層中心部から北側の包含層がなくなる部分にかけてはこの黄色砂がほぼ水平な地山として存在するが、包含層両端では異なった状況を呈している。北側は黄色砂が包含層とともになくなってしまい、シルト・砂・砂質土のかなり薄い層の互層となり、遺物はまったく含まない。一方、南端は黄色砂であった地山が途中で赤みを帯びた粘性のある土となり、調査区南

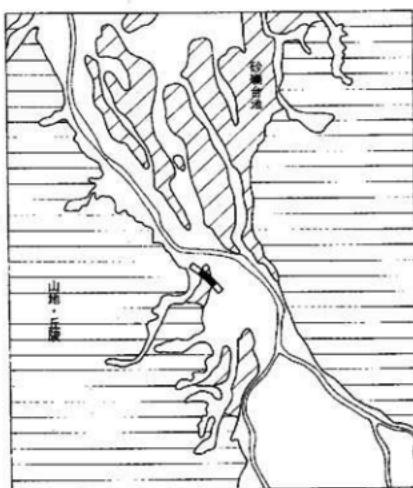


図2 松木田遺跡周辺地質図
(黒塗り部分が縄文調査区)

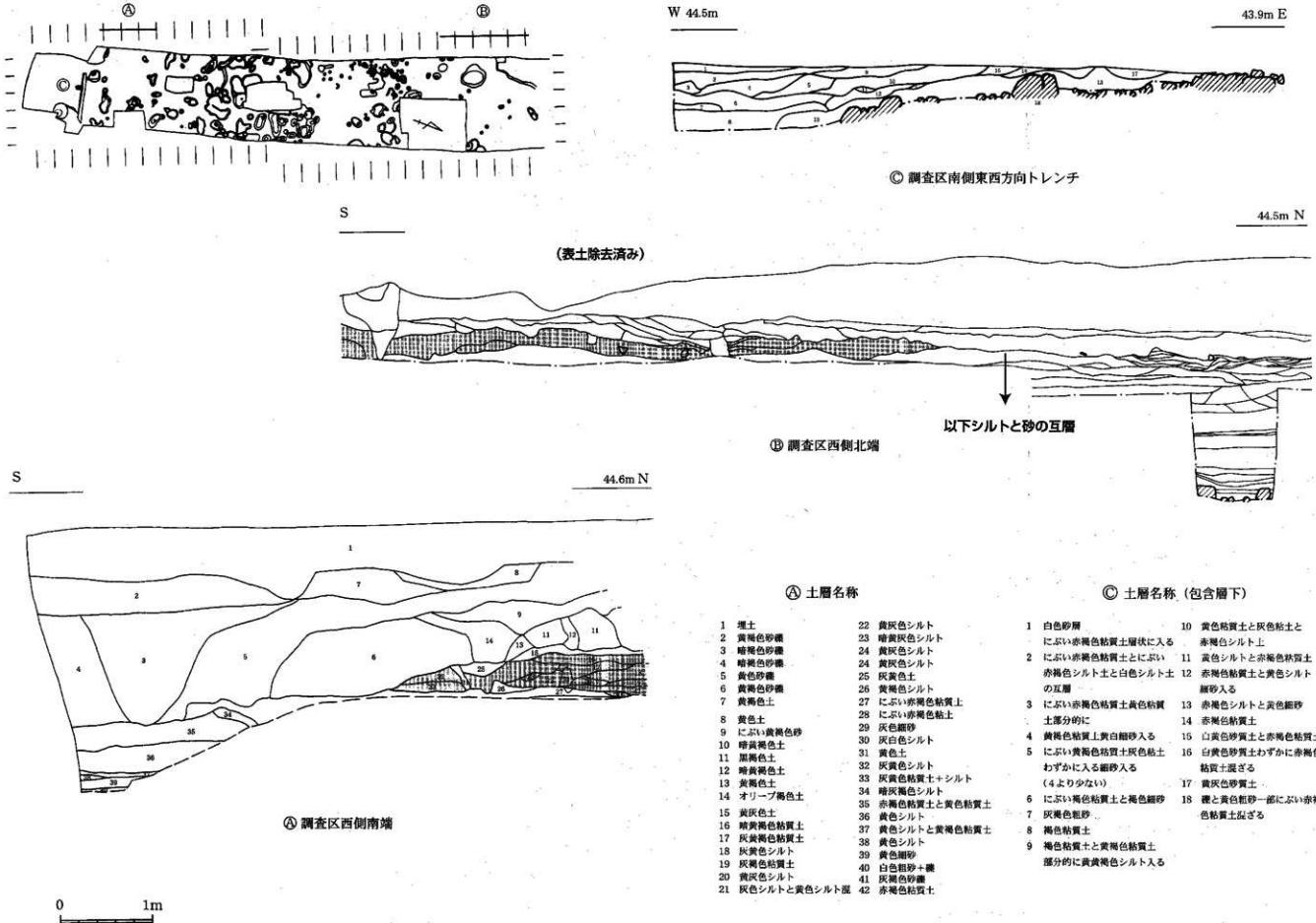


図3 土層断面図 (1/40)

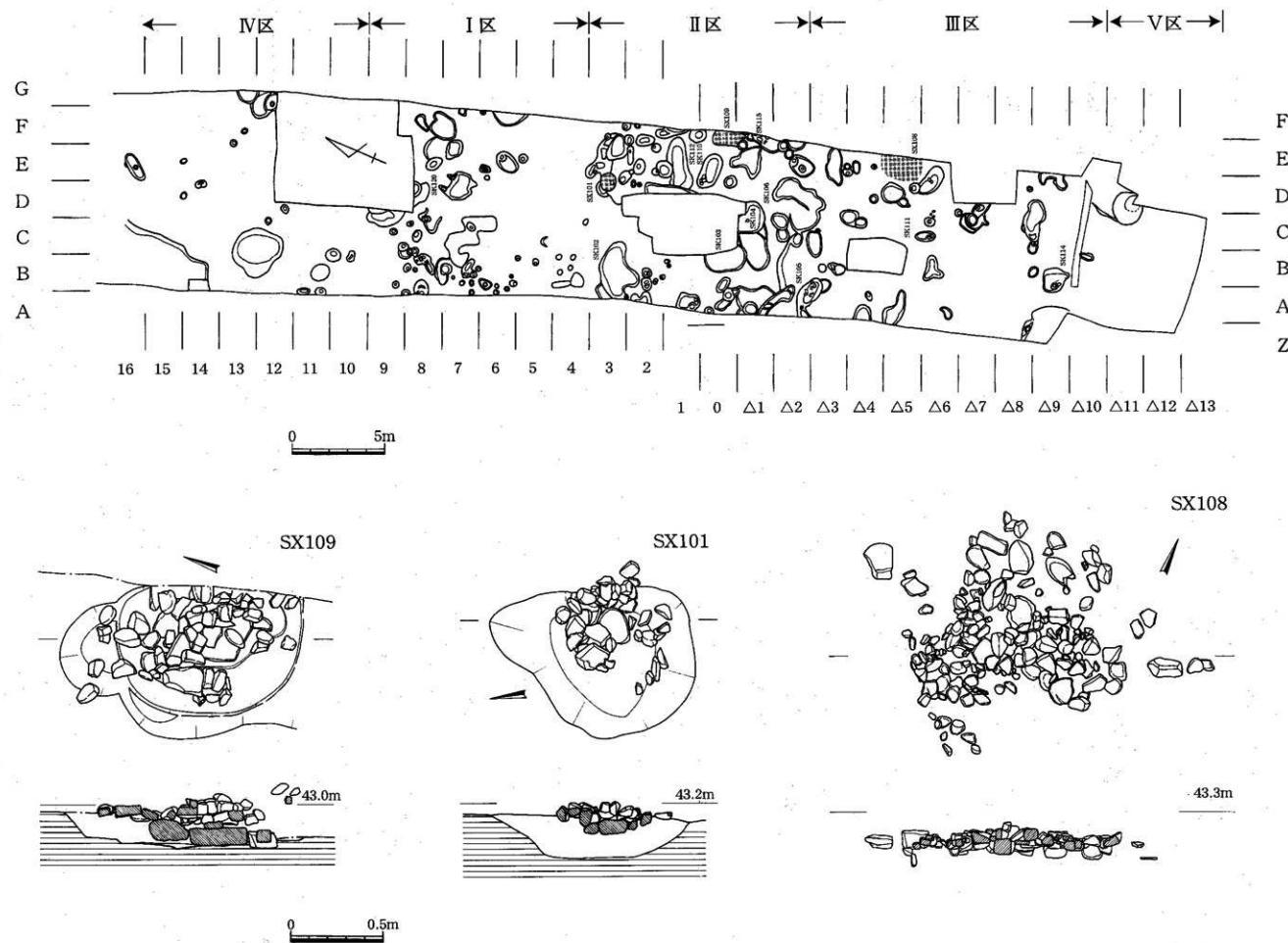


図4 遺構配置図（1/200）及び主要遺構図（1/20）

端近くで南に大きく落ち、この中からも縄文土器片が出土している。従って、縄文文化層形成時は南側に谷があり北側はゆるやかに落ちて行く、南西から延びてくる微高地であったと推察される。

2 縄文時代包含層の調査経過

縄文時代包含層の発見の経緯及び調査経過は前書に記したとおりである。調査は全体で5分割という細切れの調査になった(図4)。縄文層発見時に、調査区全体に方眼(グリッド)を組んで、調査を進めた。5分割の各区とも重機で包含層上面を出した後、全体を清掃して遺構検出を行った。ほとんど遺構はなかったものの、全体に黄色を呈する砂礫の大きな落ち込みを検出した。この落ち込みは、上層遺構面の1枚下の層から掘り込まれている。大きさは1~1.5m前後あり、深さは縄文包含層の下まで達しているものもあるが、不定形で人為的なものとは考えられ難い。上面の清掃後、移植ゴテで掘りさげを行い、遺物はすべてドットを落とした。ただし、途中大雨のため流された遺物も若干存在する。包含層を掘り下げ後、その下の層である黄白色砂層を清掃し、再度遺構検出を行い、下層遺構を調査した。従って、下層の遺構は包含層の下で検出したが、石組炉の石を包含層の上面で検出しておらず、下層遺構の掘り込み面については、黄白色層上面とは言い切れない。なお、下層文化層のさらに下の層については、2ヶ所トレンチをいれ、湧水を伴う礫層まで確認した。

3 検出遺構の概要と遺物の出土状況(図4・5)

遺構は、前述のように地山である黄白色砂層で検出したが、掘り込み面は不明である。検出した遺構については前書で記述しているので、概要のみ記す。検出遺構は石組炉2基、集石遺構1基、大型土坑1基、土坑9基である。石組遺構は掘込みの底に平坦な石を据え、周囲に石を花弁状に配するタイプであるが、2基とも壊されていた。集石遺構は石を積み上げたものではなく、一面に石が広がっているものである。大型土坑(SK102)は検出時は、径約3mの円形を呈し、住居址の可能性を考えていたが、掘り下げると南側が極めて浅く、最終の姿は図4のような形になった。床面や周囲にピットもない。ただし、この遺構の中からは石鏃を含む多くの遺物が出土し、かつ遺構の検出面で下図のような一括土器が出土した。この状況について、5 遺物の分布で詳述する。土坑群は用途不明な小型の土坑である。その多くは自然のものではないかと思われる。また、上層から掘り込まれている大型の風倒木状遺構は、地山の下まで掘り込みが続いている。

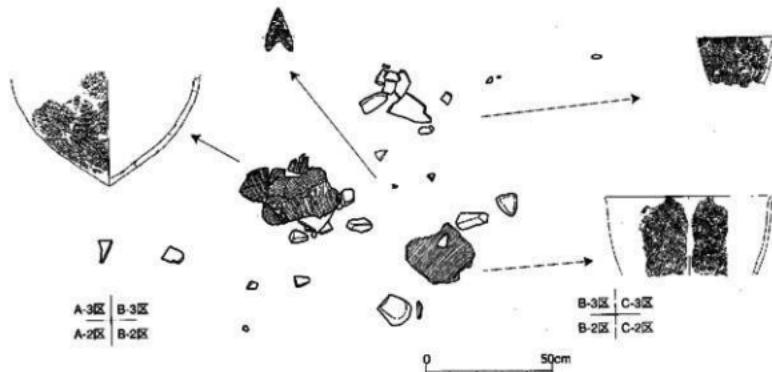


図5 B-3区遺物出土状況(1/20)

4 出土遺物

出土した人工遺物は上器と石器で、厚さ約30cm前後の遺物包含層と遺構内から出土した。

(1) 土器(図6~11)

出土した土器の総量は、数えた点数が4366点であるが、さらに包含層検出時の上器片が約300点ある。また微細片は概数しか数えていない。総個体数は出し得ないが、底部の先端の数が9点(+ α 、先端部内面のみが数点)あり、口縁部の大きめの破片からの個体数は17点で、概ねこの前後の個体数であろう。出土した土器の中に数点の土師器がある。ただしこれはドットで取り上げたものではなくグリッド一括で取り上げたもので、雨によって壁面上の上層土器が混じった等によるものと考えられる。外側に条痕を施した土器も数点認められた。またE-6区で押型文土器が1点出土した。これらについては本文中及びまとめで詳述する。この他は、底部の小さな破片で文様の認められない土器を除くとすべて撚糸文土器である。そのほとんどは、外側に斜めに文様が付くように施文している。施文部位における糸の太さ・糸と糸の間隔は個体によって異なる。内面の文様は無文・廻転撚糸文・条痕文の3種類あるが、口縁部から胴上部にのみ文様があるものが多く、胴下半はその多くは無文と思われる。施文しているものはそのほとんどが横方向に文様が付くように施文している。

器形は前書でも触れているが、大略の器形は同じであるが、個体により若干の差がある。まずほぼ全形のわかる1~3の上器を見る。1・2はD-0区から出土した土器で、同一個体と思われる。直立に近く、直線的に外傾する口縁部からするとぐるま形で尖底へと続いている。この器形は当遺跡出土土器にもっとも多い器形である。復元口径34.1cm、推定器高約30cmを測る。口唇部は平坦気味に丸く收める。外側の撚糸文は原体の糸幅1.5cm前後を測る。糸と糸の間は1cmに満たない。糸の目はかなり見づらいが、撚りはR一段であると思われる。文様は右斜め下方に走っており、すなわち原体を横方向に転がしている。口縁部から底部まで、少なくとも5回は移動して転がしている。底部付近のみ文様の長さが短く文様の施文角度を変えている。内面は全面指押さえ及び指ナデで仕上げている。器厚は1.4cmを測る。胎土には1~5mmの大粒の石英・白色粒を多く、微細金雲母を少量含み、粗い。

3は前書で報告した分で、B-3区で一括出土した土器である。やや乳房状の尖底を有する。底部から胴部へは幅広く立ち上がり、胴上部で内湾気味に立ち上がる、砲弾形に近い形態を呈している。外側には深く刻まれた撚糸文を右斜め下方向に施している。撚糸幅は2~3mm、糸と糸の間はほとんど隙間がない。器壁は約1.5cmと厚い。推定口径は45cm前後になる。

この2個体の土器の特徴である以下の点は概ね当遺跡出土土器に共通する点である。①器壁が厚い。②脆い、③胎土が粗い、④外側文様は右斜下に走る(左斜下も若干あり)、⑤直線的な尖底である、⑥粘土の接合部がわかりやすい、等であるが、もちろん若干の例外もある。さらに最大といつてもいい特徴は、文様が一見して撚糸文とはわからないことである。発見当初条痕文ではないかと思ったほどである。撚糸文であることは、条線の両端が直線ではなく、わずかではあるが、凹凸の連続となっていること、わずかではあるが、条線の底に“撚り”の圧痕が確認できる部分があることからわかる。⑦の点について、粘土の接合部はすべて下側が凸で、上側が凹である。従って、土器は底をまず作り、口縁部側へと作っていたことがわかる。

以上のほぼ共通する点とは別に、口縁部形態や内面文様などには異同がある。外側の文様もごく少數ではあるが、廻転撚糸文以外の文様が存在する。本書では当初器形による分類を行おうとしたが、明確に分離するのが難しく、以下、口縁部・胴部・底部と見ていき、細かい形態差については本文中で触れていく。また数点ある外側に廻転撚糸文以外の文様を施す土器についても、特に項目を設けず

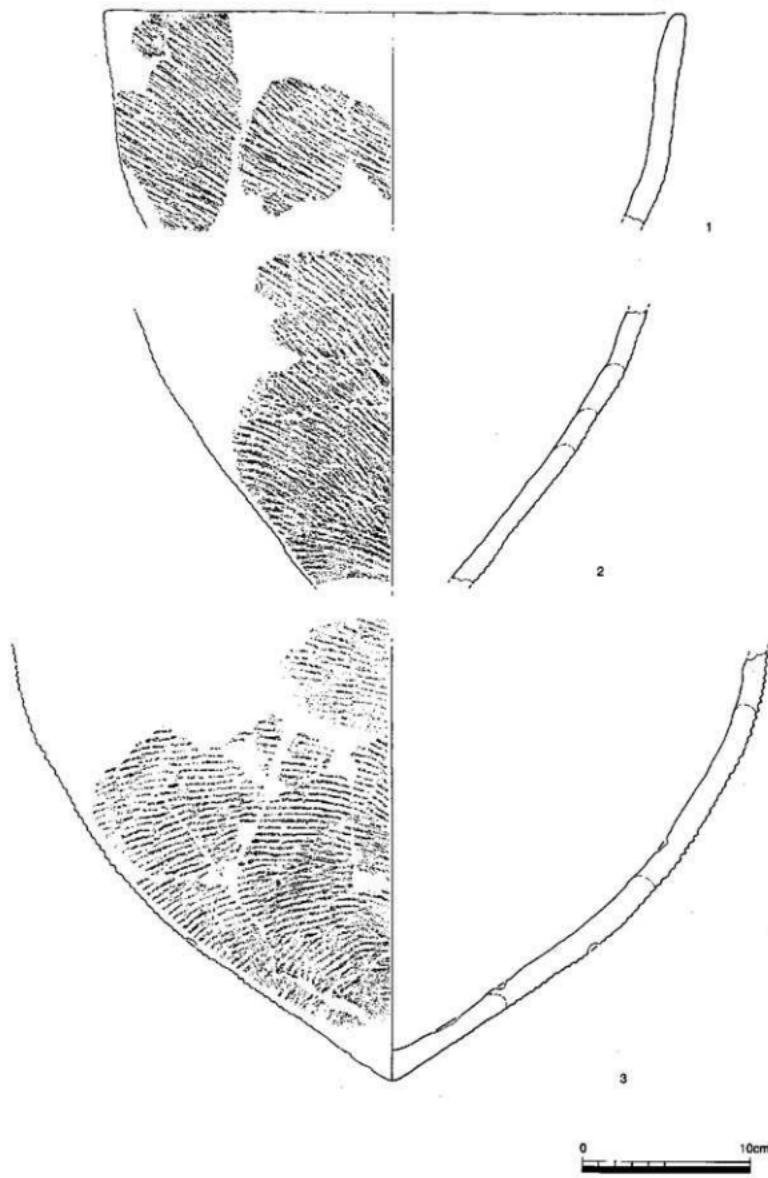


図6 出土土器実測図 1 (1/3)

に同じ文中で触れる。口唇部や裏面文様の有無などの文様構成と器形の関係など、個々の項目は巻末の土器一覧表にまとめた。なおほとんどの上器の胎土は3から5mmの大粒の石英・白色粒が多く、微細金雲母を少量含んでいる。焼成はすでにバインダーを浸けているため詳細は不明だが、バインダーを浸けなければならないほど脆い上器ばかりで、水洗い時に崩壊した上器も少なくない。色調は個体による差が大きい。

4~18は口径の復元できる口縁部片である。最小径は15・16の12.1cm、最大径は18の39.1cmで、大・中・小の機能分化があることは大きな特徴である。4は口径20.4cm、5は19.9cmで、中形に分類できる。4は全体がやや内湾気味の形態を成し、糸幅3~4mmの厚い撚糸文を斜走させる。丸みを帯びた口唇部に刻目状の文様を施しているが、纖維痕跡は見えないものの撚糸原体を押しつけている可能性もある。内面には調整時の指頭痕が残っている。5はほぼ直線的に伸びる器形である。外面に斜走する撚糸文を施すが、撚糸の纖維痕はわずかにしか確認できない。内面には5~6本を単位とする沈線状の文様を施しているが、各線の中をよく見ると細い条線が数条観察でき、撚糸原体を横に走らせた原体条痕と思われる。各最上段の文様帶の下の無文帶はナデ消したというより本来から施文していないと思われ、5ないし6本は原体に巻いた撚糸の巻き数と考えられよう。外面口縁端近くにはススが付着し、内面下部にはコゲまたはススが付着している。

6~9は大形の土器である。7はやや破片が小さいため、傾き・怪ともに圓にやや不安がある。6は直線的に底部に向かう器形である。外面の撚糸文は4に比べると同一方向になっていない。断面図に表れている器壁の凹凸は粘土の接合部と思われる。C△3区の最上部出土片と最下部出土片の接合資料である。復元口径36.3cm、推定器高23~25cm前後を測る。7は同一方向に斜走する撚糸文を外面にていねいに施す。施文時の糸幅約2mmを測る。この文様の最上部口縁端部にのみ横方向の撚糸文を施しているが、転がしているというより、5と同じ撚糸原体条痕と思われる。無文の口唇部を挟んで、口縁部内面の上部約3cmにも原体条痕を施す。この糸幅は1~1.5mmと外面の糸幅より狭いが、外面は転がしているため当然1本の糸幅はやや太くなる。7・8は比較的器面の凹凸が少ない。復元口径35cmを測る。8はSK105出土土器。外面の文様は浅い。糸と糸の間にやや距離がある。復元口径37cmを測る。9はB9区とD4区の接合資料である。怪はやや不確かである。外面の斜走撚糸文はだぶって施している。内面には粘土帶の接合部分に指頭痕が残っている。口縁端はわずかに外反している。復元口径38cmを測る。

10は口唇部に小さな山形突起が付く。同様の破片はもう1点(12)ある。山形突起の外面から内面にかけてはナデ調整である。復元口径23.4cmを測る。11は7と極めて近い土器で同一個体の可能性もあるが、色調が全く異なり、器厚も7の方が3~4mm厚いことから別個体と判断した。外面に丁寧に施した斜走撚糸文を施し、外面口縁端部と内面に撚糸原体条痕を施している。口唇部は無文である。内面の原体条痕はかすかにではあるが破片の最下部にもかすかに認められ、条痕を施した後、最後に指頭ナデを施したものと考えられる。復元口径28cmを測る。12は前書にも掲載した。10と同じく山形突起を持つ。口縁部下4cmあたりでやや屈曲する。器壁が1.4cmと厚い。外面にはススが濃厚に付着し、撚糸文はあまり観察できないが、屈曲部から下は縦方向に近く施文されている。13~16は口径12.1~17.4cmの小形の土器である。13は外面に横方向の撚糸文を施している。外面に横方向の施文をしているものは数点しかない。内面は撚糸原体条痕を横方向に施している。口縁端がゆるやかに外反している。14も内面に横方向の原体条痕を施している。一単位は3~4本からなる。口縁部はほぼ直線的に外傾し、口縁端部は尖り気味である。15も同様の器形で、口径12.1cmと出土土器の中でもっと小さく、18の1/3ほどしかない。外面にはススが付着している。16も口径12.1cmを測る。外面

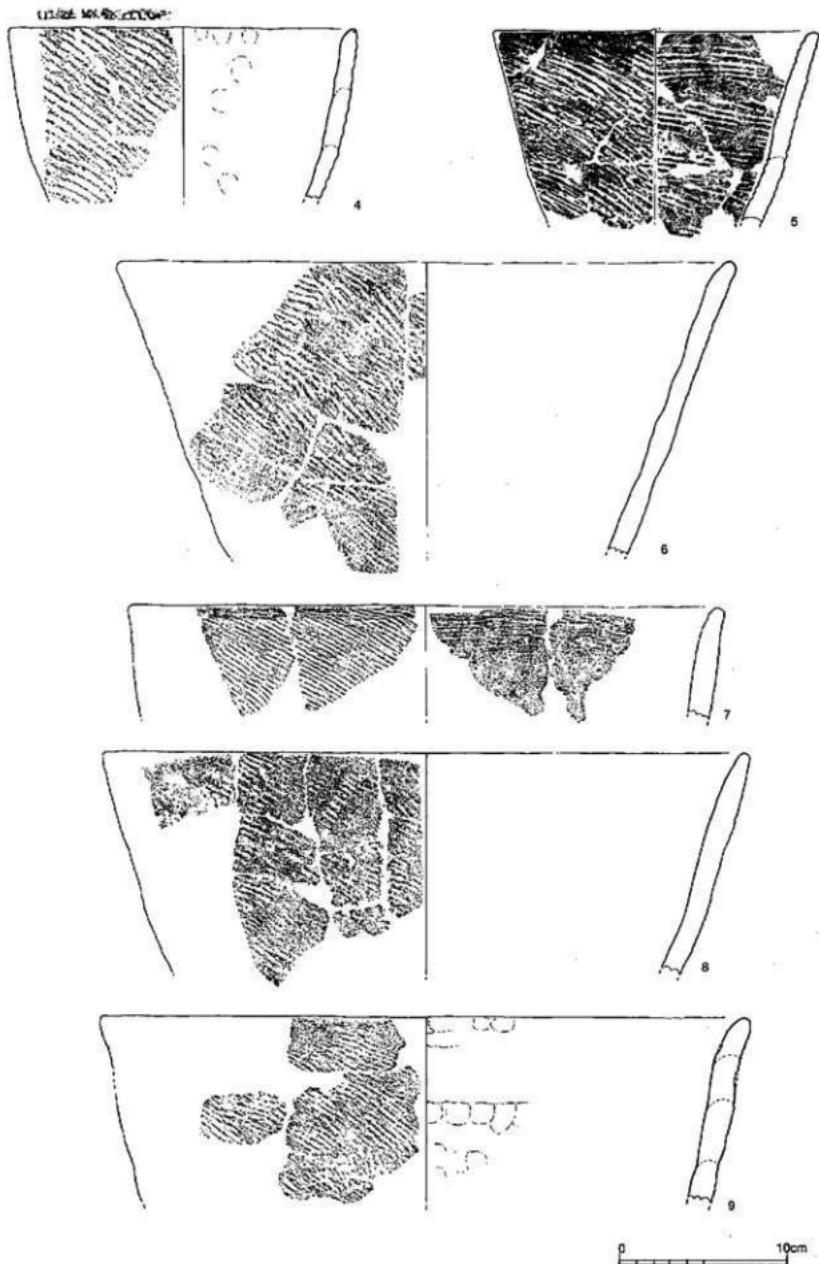


図7 出土土器実測図 2 (1/3)

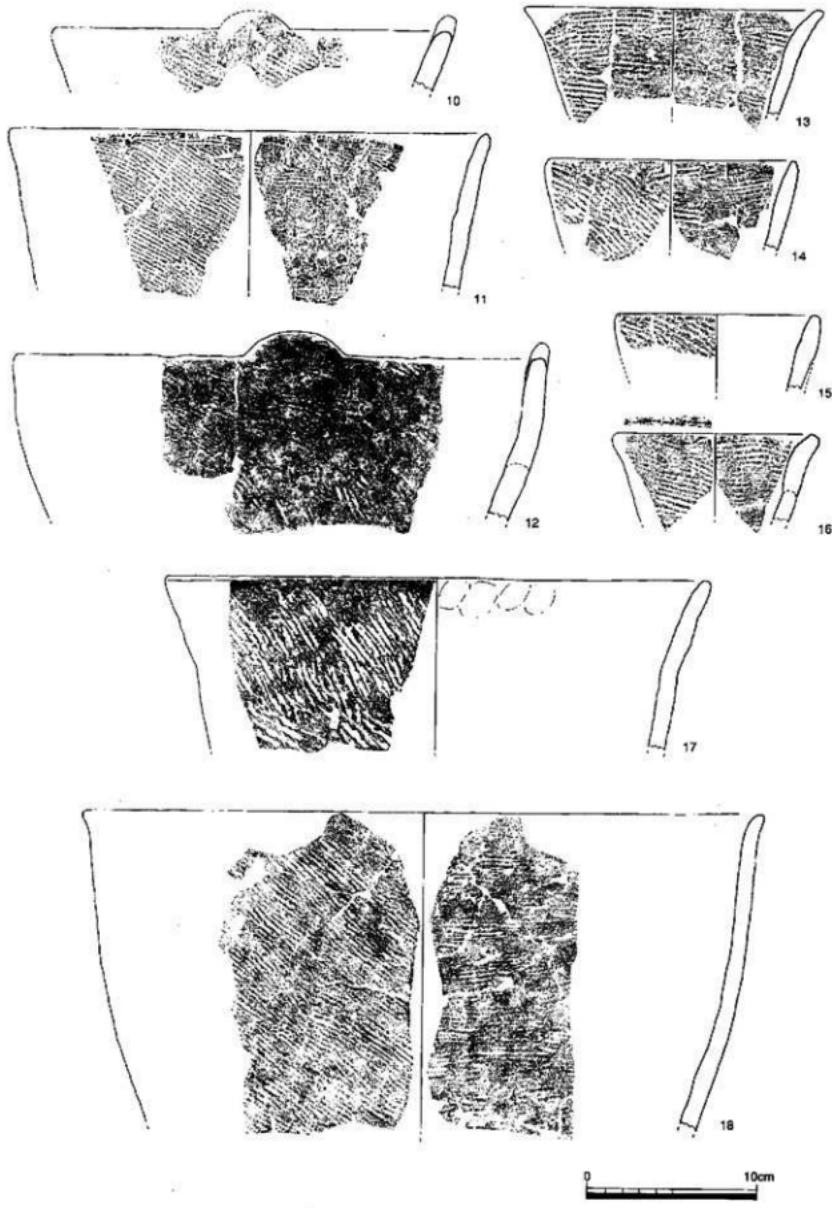


図8 山土土器実測図 3(1/3)

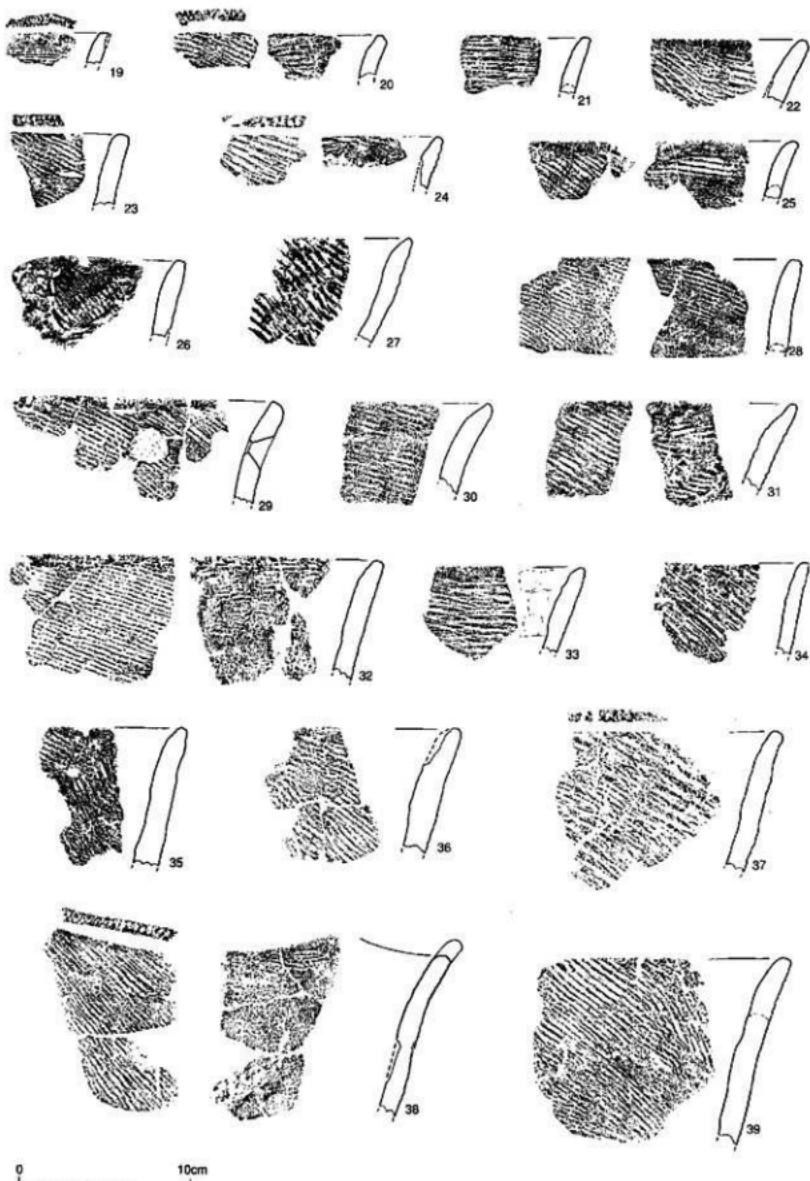


図9 出土十器実測図4 (1/3)

にはやや右斜め下方向の廻転燃糸文を施し、内面に横方向の廻転燃糸文を施している。内面に廻転燃糸文を施す土器は少ない。口縁部内面は、粘土の接合部から上が内側に大きく張り出し、その結果として口縁部が外反しているように見える。口唇部には刻目状の文様が施されているが、不鮮明なため燃糸文かどうか判断がつかない。

17は途中で外に軽く折れ曲がる器形である。口径31.8cmを測る。外面上部は縦方向に近い燃糸文を施し、屈曲部から下は右斜下方向に変わっている。口縁端部には燃糸文が及んでいない。端部内面には指頭押圧痕が残る。18は口径39.1cmを測る大形の土器である。前書に掲載したが、その際傾きに不安があったが、今回検討し直して、傾きを変更した。口縁端は軽く外反する。全体はゆるやかに内湾する。外面には右傾の廻転燃糸文を施す。内面も廻転燃糸文で横方向に施している。全面施文ではなく、口縁部近くは5~6本を一単位に若干の無文帯を挟んでいる。

19~58は径の復元できない口縁部片である。19は外面に横方向の燃糸文を施している。口唇部は平坦面を成し、そこに施しているのは燃糸を押圧したものと思われる。20もやや横気味の燃糸文を外面に施し、内面には燃糸原体条痕を横向きに施している。口唇部は平坦面を作り、刻目状の文様を施しているが明瞭ではなく、やはり燃糸原体の押圧かもしれない。21の外面文様は横方向の燃糸文である。口唇部は平坦面を成しているが、文様は見られない。22は方向の異なる燃糸文を施している。23・24はともに平坦気味の口唇部に、燃糸原体押圧と思われる刻目状の文様を施している。この2点の口唇部文様は明らかに纖維状の凹凸が観察できる。24・25の内面文様は原体条痕である。28の内面文様は廻転燃糸文である。

29・30は口縁部内面先端をつまみ出すように作り、やや外反する口縁部を持つ。31~33・35は口縁部先端を細くしている。31・32の内面文様はともに廻転燃糸文である。33は外面に横方向の燃糸文を施している。内面は最上部の粘土帶にのみ指頭圧痕が明瞭に残っている。37~39はわずかに外反する口縁先端部を持つ。37は口唇部に刻目状の文様を持つが、不明瞭である。外面の文様は粗く施文しているためか、不明瞭である。38は口縁先端部がゆるくカーブし、山形口縁に復元したが、大きな破片ではないため、單にゆがんだ口縁部なだけかもしれない。内面は最上部のみに横方向の燃糸原体条痕を施している。原体の糸幅1.5mm、糸と糸の間0.5mmを測る。口唇部には刻目状の文様を施しており、原体の押圧であろう。

40~58は37~39と同じくわずかに口縁先端部が外反するグループである。このうち48・54~56・58は先端部が急激に外反している。外面文様は右斜め下方向の燃糸文がほとんどであるが、57は外反口縁ではないが、他の土器に比べて、器厚が6mmと薄い。両面に条痕文を施している。条痕文は燃糸原体によるものかどうかわからない。いくつかの方向に施文するものがあり、粗い条痕である。この土器を含む52~54は器壁が1cm前後のやや薄いグループである。

59~65は底部に近い胴下半部の破片である。底部近くは燃糸文を施したものと、無文のものがある。燃糸文を施したものはほぼ必ず底近くで底の先端部から口縁部方向に向けて、短く掘り鉢の条線のように文様をつけている。文様は外面はいずれも廻転燃糸文で、内面はナデ調整であるが、62のみ燃糸文を施している。底部近くで文様を施しているものはほとんどない。62の内面の燃糸文は、横方向に施文しており、内面=横方向の原則を守っている。ただし全面に文様があるわけではなく、あるいは本来ほとんどの上器の内面には、調整具としての原体を横滑りした条痕が施され、のちにほとんどわからないくらいにナデ消されているのかもしれない。63は外面上に燃糸文を施しているが、縦方向に施されている。

66~73は底部の破片である。底の先端部外面が剥離したもの(73のような土器)はあと数点あるが、

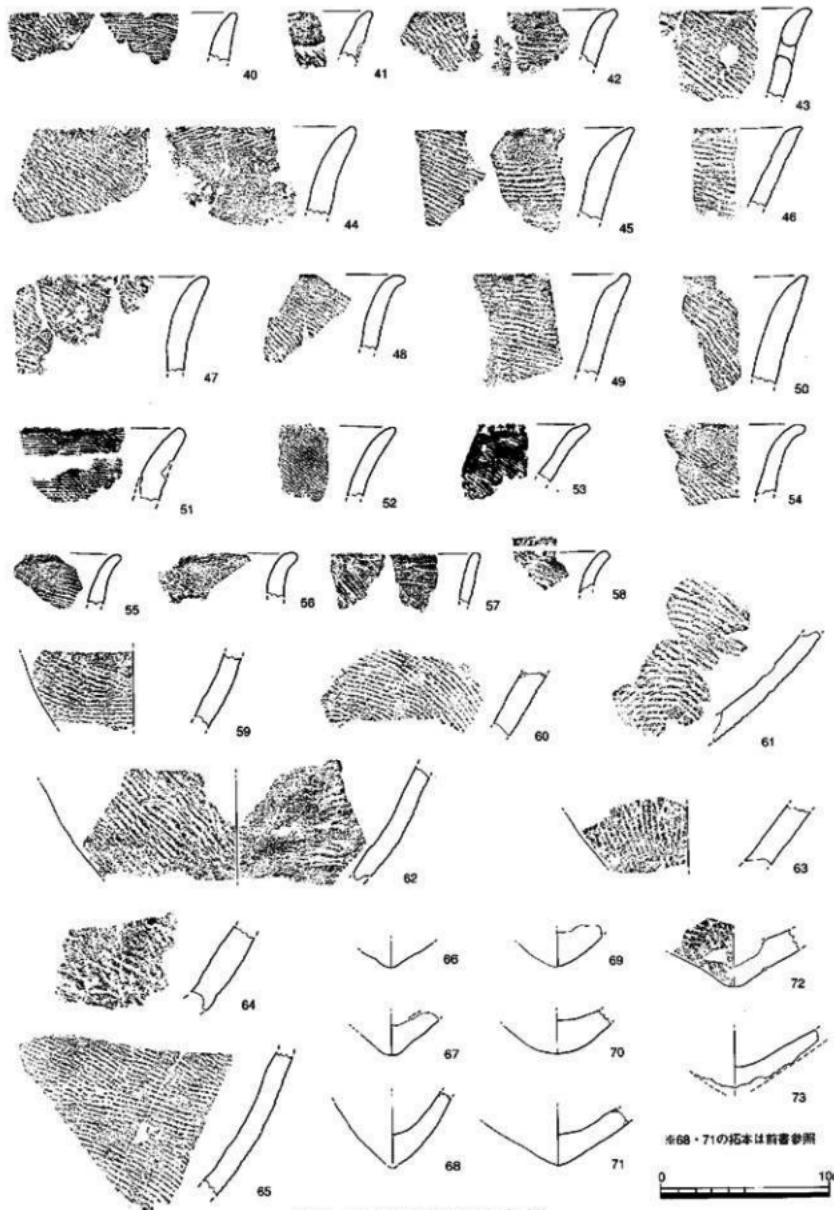


図10 出土器実測図5 (1/3)

外向先端部が遺存しているものはすべて掲載している。底先端部はすべて尖底であるが、形態は均一ではない。67・68の鋭角なもの、66・69・70の中間角度、71~73の鈍角などの3種に分けられる。この角度の差は全体の形態に関わる。すなわち開き気味の底部は、口径が大きくなり、鋭角ものは小さな口径が予想される。例えば、図6-3の上器の底部は鈍角グループに入り、推定口径は15cmと大きい。一方、図6-1・2の土器は中間もしくはやや鋭角グループになると予想できるが、口径は当遺跡で標準的なサイズに近い34cmである。従って、底部角度の差は器形の差に対応するものであると考えられる。また底先端部の形態も異同があり、やや乳房状を呈する66・72、丸底気味の70などである。粘土の接合について、まず薄い径3~5cmほどの大きさの尖底部分を作り、次に内面部分全体に粘土を貼り付けて、全体を厚くして補強している。その補強部分がはがれている部分が多い。外面文様はほとんどがナデ、もしくは摩滅のため不明であるが、68・71・72は底の先端部まで撚糸文が施されている。あるいは当初は全部の土器に撚糸文が施されていたのが、ナデ消しや使用時の摩滅のため文様がなくなった可能性が高いかもしれない。

74~91は胸部片である。外面文様は、未掲載分も含めてほぼすべて右斜め下撚糸文であるが、左斜め下方向と思われるものも若干存在する。糸幅、糸間の距離等は様々で、別表のとおりである。撚糸文以外では、条痕文が若干存在する。76は外面に条痕文を施しているが、内面には廻転撚糸文と思われる文様を施している。ただ内面はごく一部しか遺存していないため明確ではない。また外面の条痕は原体条痕ではなさそうである。77は両面とも条痕文である。規則どおりに外面は右斜め下方向、内面は横方向である。両面とも撚糸原体を使った条痕文と思われる。84も両面とも条痕文である。破片が小さいため、土器の正確な向きがわかりづらい。外面は右斜め下方向、内面は横方向である。条痕の原体は不明。78は外面に上下で異なる方向の文様を施しているが、ドの文様は廻転撚糸文であるが、下の文様を切っている上の縦方向の文様は、撚糸原体を使った条痕文のように見える。そうなれば、原体は同じとはいえる、外面に異なる文様を施した唯一の例である。87の内面には部分的に撚糸文が見え、その上にナデ調整が行われている。ほとんどがきれいに消えているため明確ではないが、内面全面に廻転撚糸文もしくは撚糸原体条痕を施した後、さらにその上をナデしている可能性を考えられる。これは口縁部片でも同様なものがあり、施文具としての原体とともに、従来から言われているように、調整具としての原体の機能も十分發揮している。

最後に90の土器について述べる。90は下層から出土した唯一の山形押型文土器である。この土器はE-6区から出土した。この区からは60点の上器が出土しているが、この区の中央にある長さ1m、幅0.5m、深さ20cmのやや細長い不定形の土坑からはこの山形押型文1点のみが出土している。残り59点の土器と12点の石器・剥片はすべてこの穴の周りから出土している。この南の区であるE-5区にも1m×0.8mの土坑があるが、1点も遺物が出土していない。これは他のグリッドや土坑の出土状況から見ると極めて異質であり、土層の記録は残っていないものの、前述の上部からの自然にできた穴と考えて間違いない。前書で若干触れたが、上層からも押型文土器が出土している。上層遺構面と下層遺構面の間は1m以上あり、下層の遺物が上層に現れる可能性は極めて低く、現に上層出土の遺物の中に、撚糸文土器は1点もない。従って、前書では可能性のひとつとして考えたが、土石流が撚糸文土器以後、押型文土器以前に起きたものと断言して良いと思う。ただし、当遺跡で出土した押型文土器は、さほど厚手ではないことや文様も粗大化していないことから後半期ではないと思われるが、細片であるため、形式名までは推測がつかない。

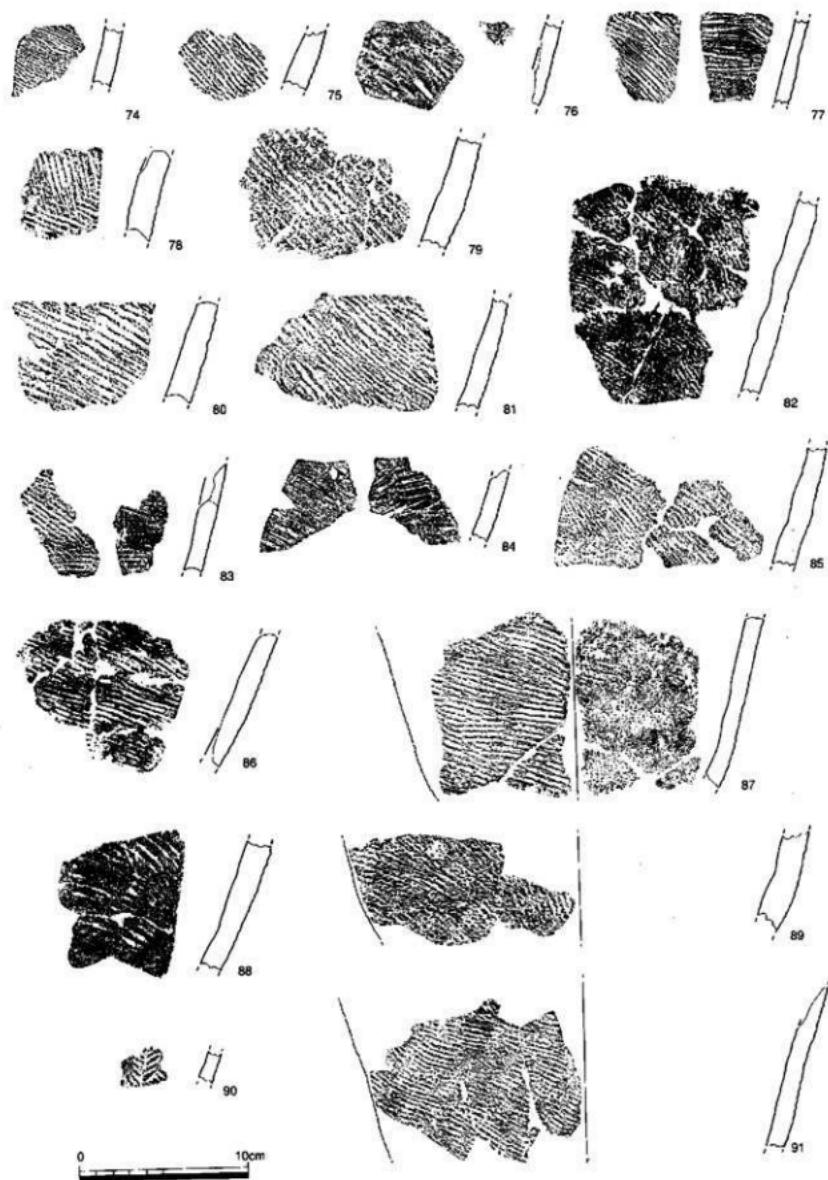


図11 出土上器実測図6 (1/3)

(2) 石器 (図12~21)

出土した石器については、基本的には全点確認したが、時間不足のため最後の方は粗い確認となつた。特に使用痕・加工痕ある剥片や石器の細片については数が増える可能性が高い。石器・剥片の接合は行えなかつた。確認した石器は石鏃及び失敗品が147点、ポイント9点、スクレイバー7点、磨石5点、石皿7点、石核8点、使用痕のある剥片・加工痕のある剥片・楔形石器である。定型化した利器の内、84%が石鏃で、89%が狩猟用道具である。剥片等は確認分が830点出土した。石器の材質は、剥片石器が黒曜石・各種安山岩・頁岩・チャート質の石材で、磨石・石皿はすべて花崗岩である。剥片以外の詳細な数字や内容は、石鏃については未掲載分も含めて、他は掲載分を石器一覧表に掲載している。以下、器種別に述べる。

石鏃 (図12~16)

石鏃は全部で137点出土したが、接合を行っていないことから若干減少する可能性があることと、逆に見落とした小片があることも考えられるが、大きな変動はないと考えられる。石材別では黒色黒曜石製74点、赤縞混じり黒曜石製1点、透明度の高い黒曜石製6点、青灰色縞黒曜石製8点、各種の安山岩製46点、赤色縞黒曜石製1点、硬質頁岩製1点である。別表に掲載している全長／脚長比、全長／全幅比、等を基準にした分類が考えられるが、ここでは感覚的にではあるが、まず大きく3つに大別する。なお石鏃は137点中、117点は掲載したが、完形もしくは準完形品の残りわずかと大きく欠損したものは掲載できなかつた。なお、137点の他に失敗品が10点出土した。

A類：無脚もしくは極めて短い抉りをもつ。三角形を呈する。

B類：やや長めの脚を持ち全形がロケット形を呈する。細身のものと幅広のものに小別可能である。

C類：下半分が曲線を描き、逆ハート形を呈する。B類に比べて幅広なもの。

ただし、各類は明確に線が引けるわけではなく、線上のどちらともわけられないものもある。また、これらとの類型にも属さないものもある。以下、分類別とそれに当てはまらないものに大別して説明する。なお本遺跡石鏃の特徴である局部磨製石鏃は各タイプに見ることが出来る。

A類

極端に短い脚（と言うより小さな抉りがある）、もしくは全く脚のないもので、全体が三角形に近い形態を示す。薄い剥片を素材にしてその周縁部を加工し、主要剥離面を大きく残したものと、厚手の剥片の全面を丁寧に加工したものがある。また全形を比べると、二等辺三角形に近いもの（112・113など）と、C類のように周縁部が丸みを帯びているもの（105・116など）、その他に大別できる。先端部の平面角度がやや鋭利さを欠く、俗に尖頭状石器と呼ばれる一群に近いものもあるが、すべてここに分類した。全長は12.8mm～27.2mmと差が大きい。全長／全幅は縦長の120が1.7であるのを除くと、0.9～1.5の範囲に入り、多くが1.2～1.4に属して幅が広いことが判る。脚長／全長は0～0.17の範囲内にあり、当然ながら脚が短い。研磨を施しているのは全21点中8点、その割合は38%である。研磨面が認められるのは、両面が101・103・107・108、片面が104・105・115・119である。研磨は概ね最後の縁辺調整の剥離に切られている。最後の調整は丁寧に押圧剥離を施しているもの（105・120など）と、かなり雑な剥離によっているもの（109・110など）がある。前者のうち、最終周縁調整の各4面（左側縁の表裏・右側縁の表裏）の調整順がわかるものがある。剥離剥出時の面が大きく残存しているのは、102・104・106・107・111・115・118である。このうち、104・115は片面に上要剥離面を残し、反対面には研磨を施している。以下、主要なものについて詳述する。

102は両面とも剥離面である。縦長の薄い剥片の周縁部を加工したものである。104・105は厚手の弓なりに曲がった剥片を利用し、弓の外側に研磨を加え、平坦化を図った上で、縁辺調整を施してい

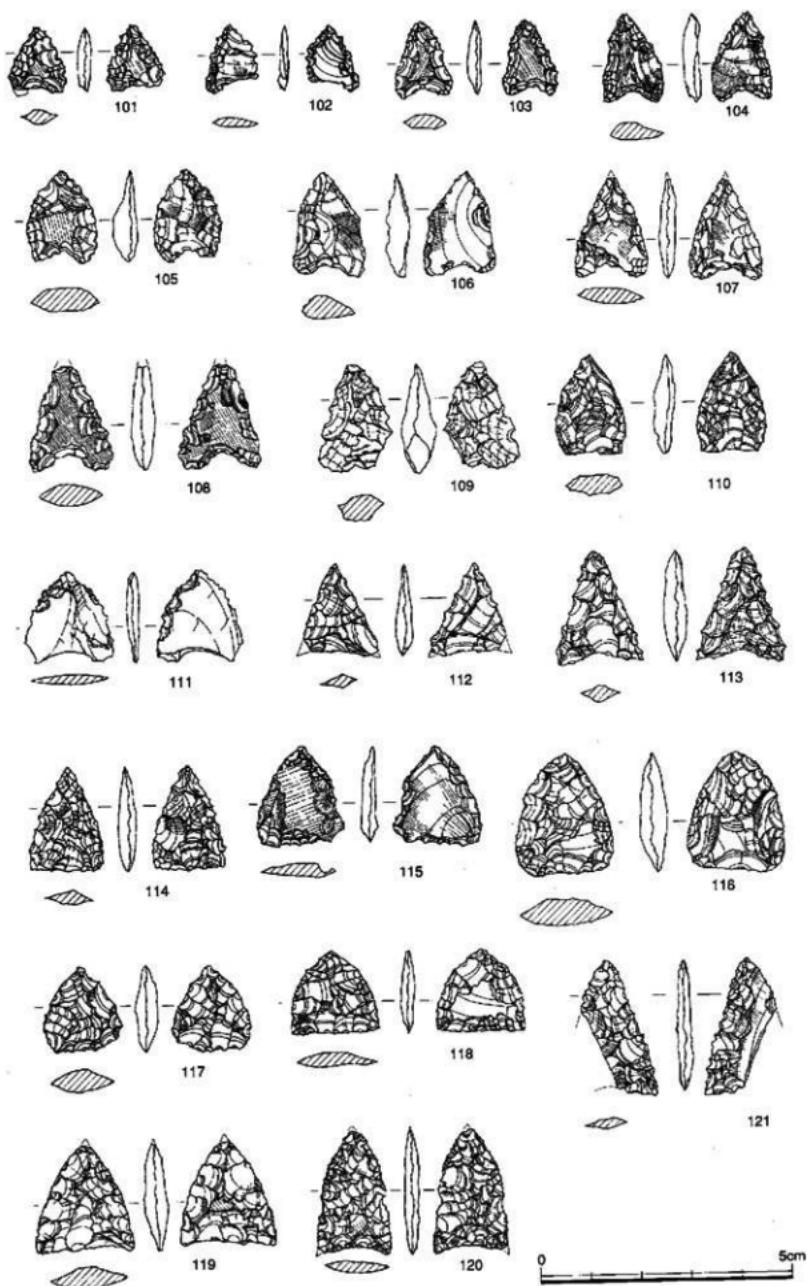


図12 出土石器実測図1 (1/1)

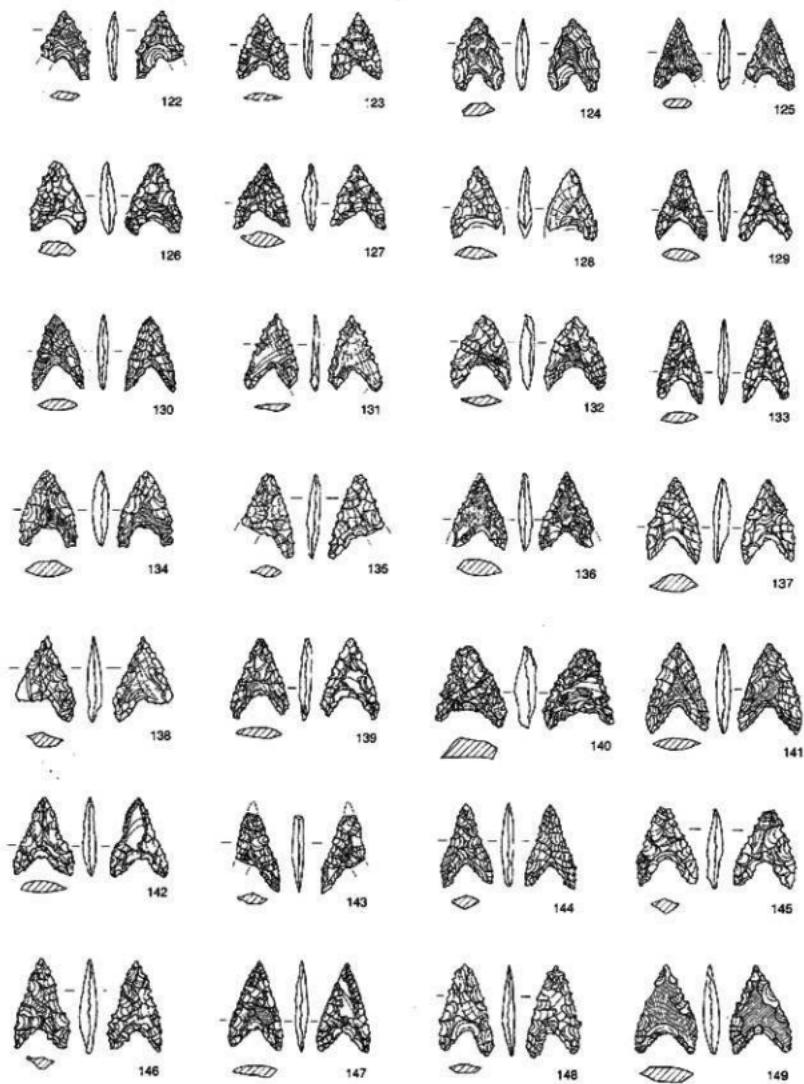


圖13 出土石器實測圖 2 (1/1)

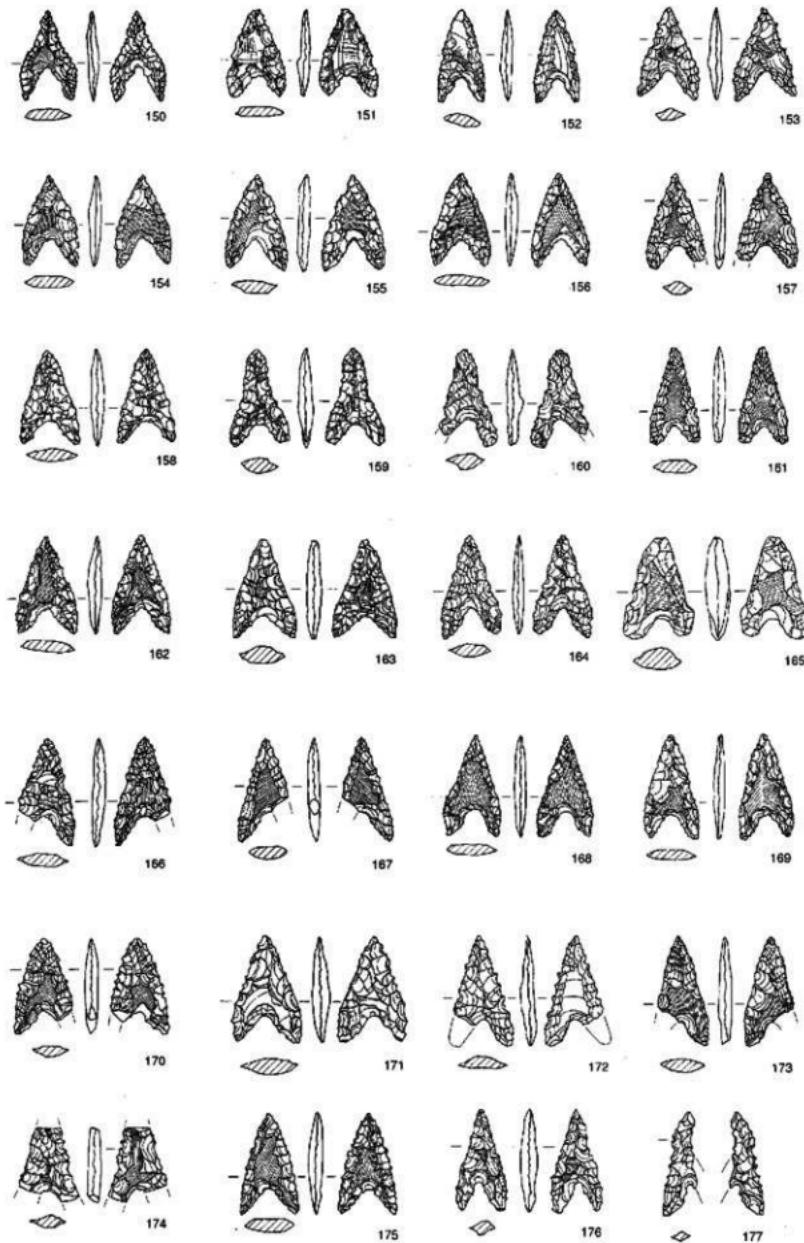


図14 出土石器実測図 3 (1/1)

る。109は厚手の剥片にやや雑な押圧剥離を加えて仕上げている。未製品かとも思ったが、製品であろう。116～118は先端部の平面角度が鈍角でやや異質な形態であるが、断面形等はやや厚手ながら、石鎚として問題ないと思われる。120は丁寧に細かい押圧剥離を行っている。

B類

もっとも数が多い。全137点中81点を占め、その占有率は59%である。ただし、次のC類に極めて近いもの、もしくはC類に入れたほうが良いかもしれないものも若干名含むが、全出土量の半分を超えるのは変わらない。当遺跡を代表するタイプであると言える。全長は12.4mm～27mm、全幅は8.8mm～16mm、全長／全幅は1.2～2.0で、その多くが1.5～1.7あたりに分布する。A類より小さい値のものもあるが、総じてA類より長い。一覧表を見れば明らかだが、長さが短い122～139あたりまでは全長に比して、幅が大きいが、これは脚を作るためにはそれなりの幅がいるためと思われる。140以降は1.4未満は1点しかなく、長さが長いものは多いが、幅は極端に大きいものはない。脚長／全長は0.20～0.58で、0.25～0.3前後に分布するものが多い。研磨しているものは、両面研磨が39点、片面研磨が9点、計48点で、全B類中の59%を占める。研磨は最後の周縁調整に切られているものが多いが、147・185のように研磨が剥離を切っている部分が多いものもある。これについては「まとめ」で触れる。また研磨面積が大きいものがあるのも、この類の特徴である。もっとも頗るなのは186で、ほとんど全面が研磨されており、表面ともに平坦である。剥片剥離時の面を残しているものは少ない。128・131・183が大きく剥離面を残しているが、その他では中央部に若干残っているものがある程度である。当類のもうひとつ特徴は押圧剥離の丁寧さである。細く長い押圧剥離を端から順に丁寧に施しているものが多く、剥離順がわかるものが少なくない。全体の形態はさらにいくつかに細分できそうで、先端部が細いもの（159など）、側縁が直線で左右対称なもの（161など）、側縁部がわずかに弧を描くもの（147など）などがある。また側面の形態は整ったものが多い。以下、主要なものについて説明する。

124は次のC類に入れたほうが良いかもしれない。130は①左側縁表面を上から下に剥ぎ、②その裏側（右側の右側縁）を下から上へ、③右側縁裏面（右図の左側縁）を主に上から下へ、④最後に右側縁表面を上から下へ押圧剥離を行っている。140はかなり雑な作りで、あるいは未製品か。142も130同様に順序がわかる。147は表面左側縁上部と右側縁上部の剥離内にまで研磨が及んでおり、両部分には、研磨後の剥離が認められない。150は先端部が細く、途中から横に膨れる形態である。152は両面とも剥離面を残している。150の全形はほぼ左右対称で、わずかにカーブする側縁部と長細の均齊な形態である。160以降は概ね長さ2cmを超える大型品である。165も研磨後の剥離が認められない部分がある。177は先端部のすぐ下から欠失しているように見えるが、先端部の下約1cmの右側縁は生きており、右側縁先端近くは中に入り込む特異な形態をしている。184の先端部は鋭利ではないが、先端部から内部に向けて細かい押圧剥離を行っており、他とは異なった剥離・形態をなしている。186は前述のようにほぼ全面を研磨している。186・187は、A類の121とともに当遺跡出土石鎚でもっとも大きなものであるが、それでも2.7cmを測るにすぎない。

C類

やや幅広で、側縁全体がやや弧を描く形態のものである。概ね逆ハートの形態を呈している。B類に入れたほうが良さそうな、やや不明確なものも入れて23点ある。主要剥離面を大きく残しているものが8点ある。さらに中央に剥離面を残しているのが、3点あり、約半数が剥片剥離時の面を残しており、当類の特徴になっている。全長は12.2mm～22.6mmと他類と同じく範囲が広い。全長／全幅は1～1.5であるが、1.4前後に集中しており、B類より幅広くA類に近い。脚長／全長は0.3前後が多く、

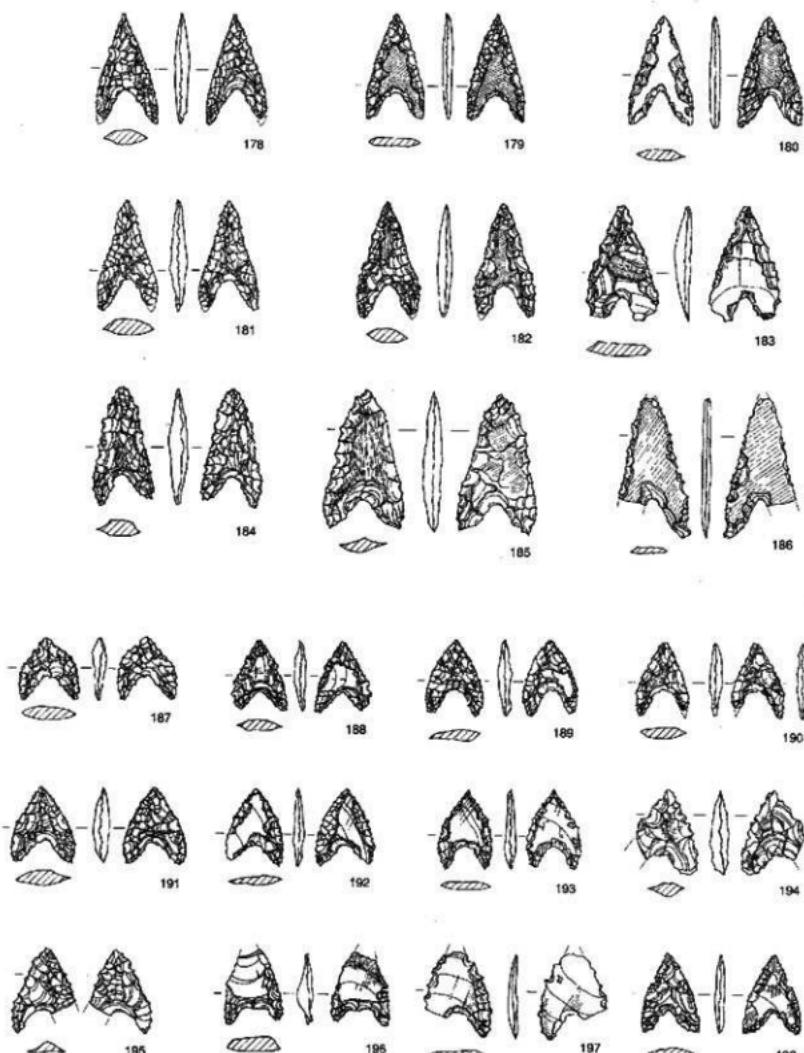


図15 出土石器実測図4 (1/1)

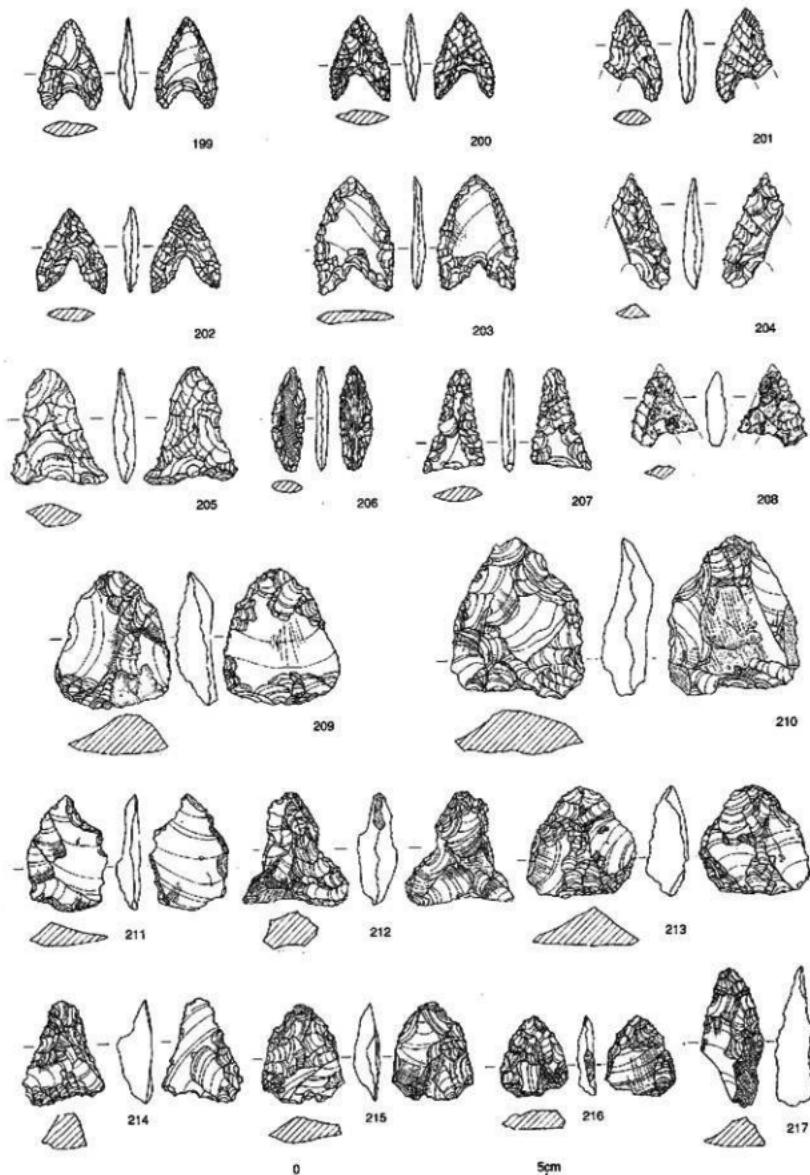


図16 出土石器実測図 5 (1/1)

B類に近い。研磨を施しているのは、190・198と未掲載分（ただしこのため、B類に属する可能性もある）の3点が両面研磨しているのみで、当類中の割合は13%しかない。しかもB類のように研磨面積が大きいものではなく、中央にわずかに認められるのみである。以下、主要なものについて述べる。

187は先端部が錐状に突き出、脚が全長に比べて長い特異な形態を呈する。191は押圧剥離の順番が明瞭にわかる。192・193・196・197は両面とも剥離面を大きく残し、周縁部のみを加工しているものである。196は左側縁上部は調整を行っておらず、剥片時のままである。201は裏面左側縁の押圧剥離が反対側縁にまで長く伸びている。204はむしろB形に入れたほうがいいかもしれない。剥離面が残っているものを見ると、縦長・横長の両剥片を利用している。

その他

上記3類型に属さないものなどである。205はかなり特異な形態をしている。木製品かとも思われるが、抉り部分の加工を行っていることや、長い押圧剥離も行っていることから、製品の可能性もある。ただし、先端部の平面形は尖っていない。押圧剥離も不定形な方向から入っている。206はポイントの形態であるが、大きさから考えて石鎚と思われる。唯一の赤色の絹混じり黒曜石製である。中央部は両面とも研磨を施している。長さ20.7mmを測る。207はやはり当遺跡唯一の硬質頁岩製の石鎚である。下部を欠失しているため、全形は不明だが、B類に入るのではないかと思われる。208は黒曜石製の石鎚であるが、全面に火を受けて、いわゆる火ぶくれ状態になっている。剥離も明確には見えなくなっている。

209～217は失敗品（未製品）である。209は黒曜石製。下側には自然面が残る。左側縁は大きく剥離をし、右側縁上部と裏面右側縁の上部には押圧剥離が施されている。先端部は尖っていない。完成すればA形石鎚に属する。210は安山岩製で、長さ30.3mmと大きい。裏面には自然面が大きく残る。押圧剥離は確認できないが、ほぼA形石鎚の形を成している。遺棄理由は裏面の自然面が取れないためか、あるいは右側縁上部を取りすぎたためか。211は薄い縦長剥片を使っており、右側縁に細かな調整がある。裏面の剥離面は完成後もそのまま残されるのであろう。左上部に深い剥離があり、これが失敗理由か。漆黒黒曜石製。212は全形は石鎚とやや異なるが、右側縁下部に押圧剥離があるため、掲載した。B形の159のような形になるか。左側縁が絶壁のようになっており、ここが失敗か。漆黒黒曜石製。213は青灰色黒曜石の縦長剥片を用いる。右上にパルプが残る。裏面はもともと平坦に近いが、さらに左下と右上から細長い押圧剥離が施されている。表面も左上と右下に小さな剥離がある。下を大きく取られており、この部分を失敗したのであろう。214はほぼB形の全形に近い形態を成す。漆黒黒曜石製。表面は中央が大きく盛り上がる。表面には基部と側縁に細かな調整が行われている。この後に表面を研磨して、高さを低くすると思われるが、研磨痕はない。215はA形の形がほぼ出来上がっている。表面は右下を除いて押圧剥離があり、裏面は右側縁に調整が入る。完成直前と思われるが、右側縁の垂直面をとり切れないで放棄したものか。漆黒黒曜石製。216は長さ15.6mmと小形である。表面は全面に、先端部は各面からの押圧剥離があり、ほぼ出来上がりつつあるが、やはり右側縁下部の垂直面をとりきっていない。217は下部がなく全長がわからないためここで取り上げたが、断面形等を見れば、ポイントの失敗品の可能性も考えられる。先端部から2cmほどは丁寧な押圧剥離があり、ほぼポイントないし石鎚の先端部の形態が出来上がっている。図の右下は自然面で、左側は割れている。この削れ面が製品完成後のもので、本資料も製品ではないかと考えたが、右の自然面が不自然であり、失敗品とした。失敗品と考えられるものはこのほかにも2点あり、205を除いても全部で10点となり、多い印象を受ける。

石鎚全体を通してみると、研磨を施している石鎚は60点で、全石鎚中に占める磨製石鎚の割合は44%であるが、全石鎚の数には細片も含まれているため、実際は5割近いと考えられる。また、実際には研磨を施したもの、最後の周縁調整のために研磨部分がなくなってしまったものもありそうである。特に細長い押圧剥離が全面に見られるものはその可能性がある。磨製石鎚の大部分はB類に含まれ、全体に占めるB類の量の多さとあわせて、当遺跡を代表するタイプの石鎚と言える。一方、欠損部分のある石鎚は62点で、45%である。この中にはごくわずかな先端部欠損や脚の先端部欠損が含まれており、使用に耐えない欠損率はさらに低い。つまり遺棄された石鎚の半分以上がまだ使うことのできる石鎚である。

ポイント（図17・18）

槍先と考えられるものである。1点のみが、やや青灰色を帯びた黒曜石製で、他はすべて安山岩製で、10点が出土し、全点掲載した。218～220、223は小形のもので、石鎚の可能性もある。218は安山岩製で、上半部を欠失する。もともと薄い剥片に押圧剥離を加えており、裏面は剥離面のままである。厚さ3.4mmと石鎚並に薄い。全長を復元しても3.5～4cm前後と小さく、石鎚かもしれない。ただし石鎚の中にこの大きさのものはない。219は安山岩製で、先端部を欠失する。現存長31.4mmを測る。表面には中央に稜が走り、裏面は剥離面のままだが、中ほどに段がつく。左側面と先端部及び基部に調整を加えている。失敗品の可能性もある。220はやや湾曲した横長剥片の周囲を調整したもので、長さ36.1mmを測る。安山岩製。右側縁全面と左側縁の一部に小さな調整を加えて形を整えている。先端部の加工が明瞭ではなく、スクレイバーもしくはポイントの失敗品の可能性もある。221は安山岩製で、長さ61.6mmを測る。平面形は弓形に曲がり、両面の縦方向に走る稜は片側に寄り全形にあわせて弓形に曲がる。両面ともほぼ全面を研磨しているが、表面は研磨後の調整が多いのに対し、裏面は少ない。裏面の稜は明確で、研磨によってできたものである。つまり、研磨時に弓形に曲がる形を意識していた可能性が強い。222は基部を欠失する。現存長40.2mmを測る。表面は中央に稜が走り、裏面は平坦面を成す。両面とも細長い押圧剥離を十分加えており、裏面は反対の縁まで伸びる細長い押圧剥離で調整している。右下は激急に中に入ってしまい、基部はやや左よりに作られているものと思われる。223は安山岩製で先端部を欠失する。現存長36.7mmを測る。基部の両側に抉りを作り、いわゆるアメリカ式石鎚に似る。ほぼ全面を調整し、一部は細長い押圧剥離を加えている。224は横長剥片の縁に調整を加えたもので、長さ45.1mmを測る。安山岩製。225は裏面の大半に自然面を残す。漆黒黒曜石製で、長さ52.3mmを測る。表面は全体を形作る大きな剥離と周縁部の小さな剥離の両者が施されているが、裏面は基部調整のための剥離しか行われず、大半が自然面のままである。ポイントの失敗品と思われる。226は安山岩製のポイントで、先端部及び基部の端部をを欠失する。現存長45.1mmを測る。断面形は概ねレンズ状を呈する。全面を丁寧な押圧剥離で形成する。上下・左右ほぼ対称形であるが、下半分がやや膨らんでおり基部と判断できる227は基部と思われる。安山岩製で、現存長45.1mmを測る。両面とも中央部に研磨痕が残る。断面形はレンズ状を呈し、縁辺部の角度が急である。研磨に切られる剥離と、研磨を切る剥離の両者がある。

スクレイバー（図18・19）

9点出土し、多くが安山岩製。このうち6点を掲載した。228は縦長剥片の両側縁及び先端部に調整を加えたもの。調整は連続的に細かい押圧剥離である。裏面基部にはバルブが残る。長さ54.4mmを測る。229は縦長剥片の片側及び下側を調整して刃部をついている。左側縁基部側はその後の欠失か。長さ47.3mmを測る。230は裏面左側縁の全面に調整を加えて刃部を作る。また表面左側縁と下先端部にも調整らしきものが観察できる。231は自然面を残した縦長剥片を利用。自然面と反対側全面に刃部

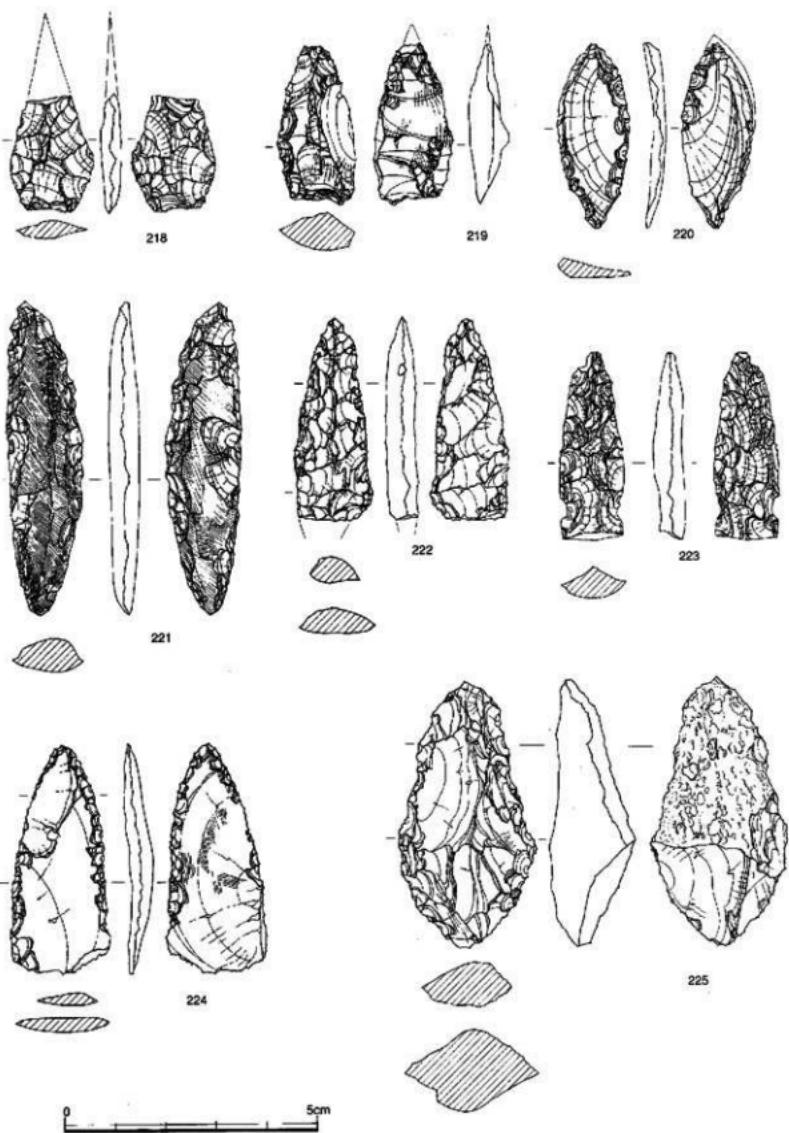


図17 出土石器実測図 6 (1/1)

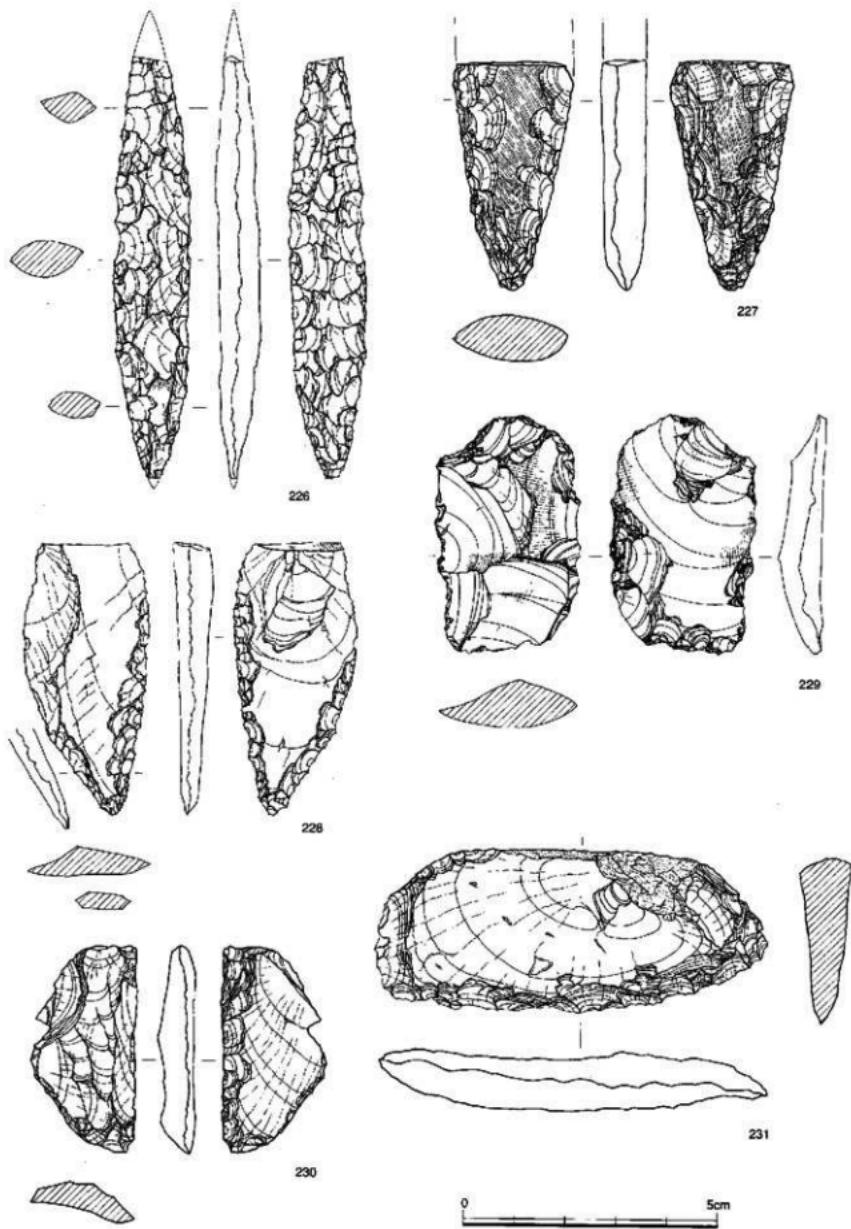


図18 出土石器実測図 7 (1/1)

を作る。裏面上部全面と表面上部の一部に自然面が残るが、自然面の傾斜角度を見れば、直径20～30cm前後の円錐を3～4番目に剥いだ剥片と考えられる。断面形から横形と判断した。232は表面の縦長剥片を用い、両側縁部にやや大きな調整を加えて刃部としている。岡の表面中央部分にノッチ状の剥離が加わり、左側を茎のようにしている。これを茎と理解すれば、縦形の石匙ということになる。ただノッチ状の剥離は明確ではなく、裏面はさらに不明確でよくわからない。本遺跡では228や230のように、縦長剥片の両側に調整を加えてスクレイパーとしている例が多く、縦形石匙が出現しつつある時期であるかもしれない。233は中央に稜が走る。表面左側縁に調整を加えている。裏面はほぼ全面剥離面である。先端部が尖り気味のため、ポイントかとも考えたが、先端部の角度がポイントにはそぐわない。あるいはポイント・石鎌の未製品かもしれない。チャート製か。

使用痕ある剥片（図20）

13点確認したが、剥片は全点詳細に観察できず、さらに点数が増える可能性がある。紙数不足のため2点のみ掲載した。ともに刃器状の縦長剥片を利用している。両側とも利用している。ともに漆黒黒曜石製。他のものは、様々な形態の剥片の1ないし2側縁を利用している。

加工痕ある剥片（図20）

加工痕のある剥片は全部で5点確認した。これらは石鎌や他の製品になるはずのものや、ナイフのプランティングのような役目をもつものと思われる。240は黒曜石製。各方面から小さな剥離が加えられている。部分的に自然面が残されている。あるいは、小形の石核かもしれない。

剥片等（図20）

フレイク・チップの類で、全部で830点確認した。黒曜石製474点、安山岩製345点及びその他である。グリッド別の出土数は表5のとおりである。詳細な石材別点数や大きさ別点数の把握はできなかつた。比較的小さな剥片やチップが多い。剥片の中には表皮を全面に残したものがあり、黒曜石は直径10～20cm前後の円錐を使用したもの多そうである。上記2種の石材以外には、頁岩質のもの、チャート質のものも数点ある。さらに玄武岩と思われるものが2点あり、注目ができる。

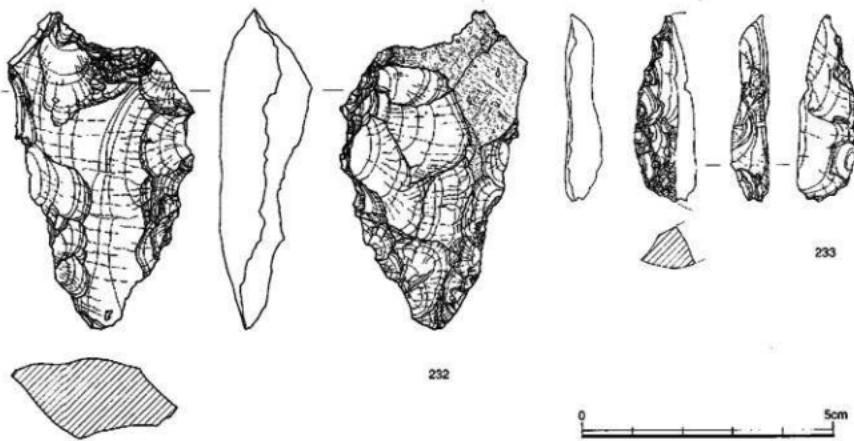


図19 出土石器実測図8 (1/1)

石核 (図20)

石核と判断できるのは、7点ある。内4点を掲載した。いずれも長さ5cm内外の小さなものである。234はハリ質安山岩製。長さ57.9mm、幅29.0mm、厚さ11.6mmを測る。裏面は全面自然面である。原石は大きめの角礫であろう。左・下・右上・上の4方向から剥片をとっている。最後に剥出しているのは上縁からであるが、その前に上の面を1枚大きく剥いでおり、打面形成のためと考えられる。1枚の剥片は2cm内外のやや横長の小さな薄いものが多い。235は漆黒黒曜石製。長さ43.2mm、幅38.5mm、厚さ18.2mmを測る。熱破碎などに見られる放射線状剥離の打面である。裏面は綫長の剥片を1枚とっている以外は、周縁の小さな剥離を除いて、自然面である。自然面のカーブからは径10~15cm前後の円礫と思われる。右側縁から剥いた後、下から綫長の剥片をとり、上面を剥いで打面を作った後に上側縁から剥ぎ、さらに左から小さな剥片をとっていると思われる。綫長剥片は長さ2.5cm内外、左側縁からの剥片は幅1.5cm前後の横長のものである。やや厚みを残したまま放棄している。236はハリ質安山岩製。長さ41.5mm、幅31.5mm、厚さ10.3mmを測る。裏面上部に自然面を残す。剥離は裏側から2回行われ、さらに表面で左、右、下、上の順に4回剥ぎとっている。ほとんどが不定形で幅が2cm前後の小さな剥片を作り出している。237は漆黒黒曜石製で、長さ34.9mm、幅20.6mm、厚さ8.4mmを測る。裏面はほとんど自然面である。原石は角礫か。下縁に素材のボジ面が残っている。打面は自然面が主である。剥離は下から2枚剥いた後、上側縁から1枚以上の剥片をとっている。未掲載の石核もこれらとほぼ同類であり、一部で綫長の刃器状の剥離を作っているものの、多くは小型の不定形剥片である。これらは大きさや形態から考えて、石核を作るための剥片製作が主であったと考えられる。以上の他に、ごく小さな円礫から綫長剥片を数枚剥いだと考えられるものが数点ある。剥片は幅1cm以下の狭いものと思われ、いわゆるUFとして使用するものか。

磨石 (図21)

磨石と明確に判断できるのは5点で、3点図示した。すべて花崗岩である。それ以外に破片で不明瞭だが、磨石の可能性があるものが数点ある。また堆積岩で全面磨かれているものがあるが、花崗岩製のものに比べて形が整っておらず、花崗岩製のものが磨り面とそれ以外の差が大きいのに比べ、堆積岩のものはほぼ全面が等しく磨かれているため、自然による摩滅と判断した。241は長さ7.5cm、厚さ4.7cmを測る。両側縁がよく磨かれ、下側縁に敲打痕が残る。242は長さ10cm、厚さ4.3cmを測る。いわゆる石敲形の磨石で、同形態のものがもう1点ある。両側縁がよく磨かれ、下側縁に敲打痕がある。表面中央には小さな窪みがある。243は大型の磨石で、両の上辺が磨かれている。また下側縁に敲打痕が残る。長さ12.4cm、厚さ7.2cmを測る。

石皿 (図21)

石皿と明確に判断できるのは7点で、すべて花崗岩製である。この他に小破片で石皿らしきものが数点あるが、よくわからない。244は現存長22.8×21.5cm、最大厚6.5cmを測る。ほぼ全面擦られており、上面が左側に向けて大きく傾斜している。245は現存長18.5×17.5cm、最大厚8cmを測る。全面すられている。246は長さ15.9cm、幅13.4cm、厚さ6.2cmを測る完形の小形の石皿である。中央部が擦られて窪んでいる。247は長さ27.4cm、幅20.5cm、最大厚10.5cm、最小厚8.5cmを測る完形品である。全面擦られているが、特に中央の径4cm前後の範囲は特に良く擦られている。また擦り面図のは下側にやや偏在している。248は他に比して堅い花崗岩を使っている。断片で現存長12.8×8.3cm、最大厚4.1cmを測る。図の中央やや左側に窪みがあり、その窪みから左側に暖昧な線状の窪みがある。他に図化出来なかったが、花崗岩製の大形台石と考えられるものがある。

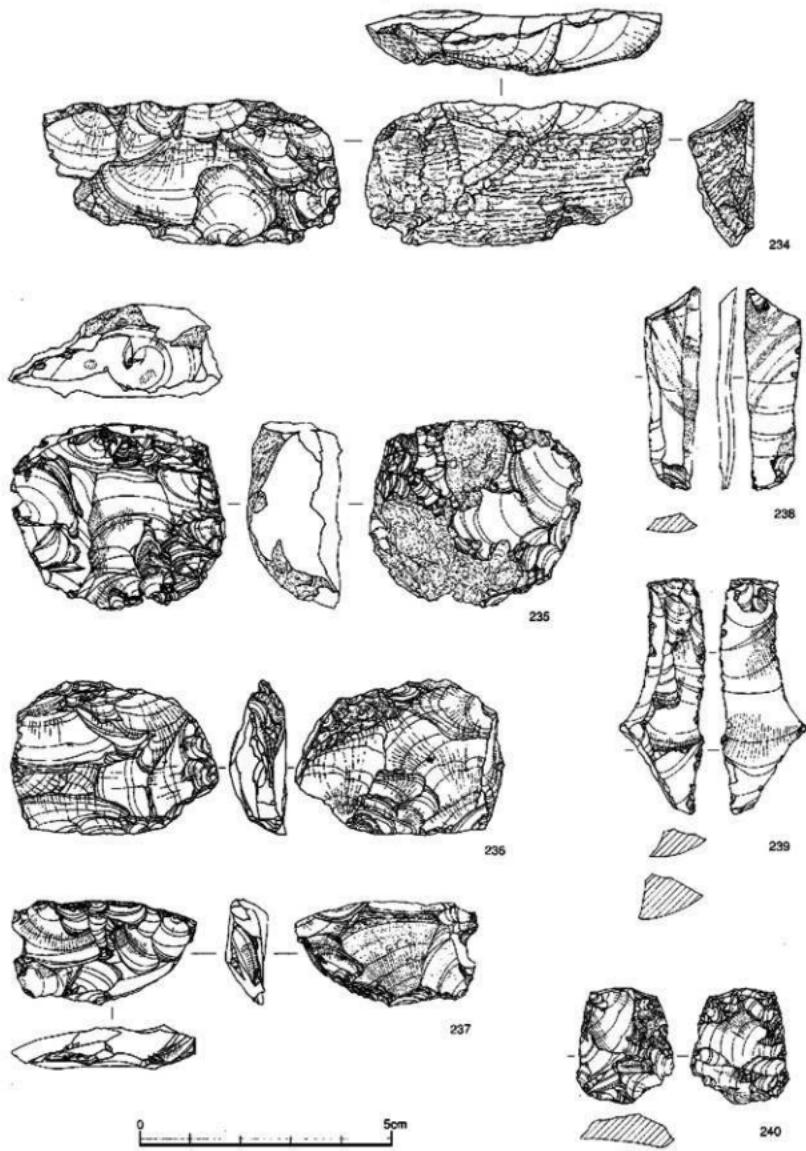


図20 川土石器実測図 9 (1/1)

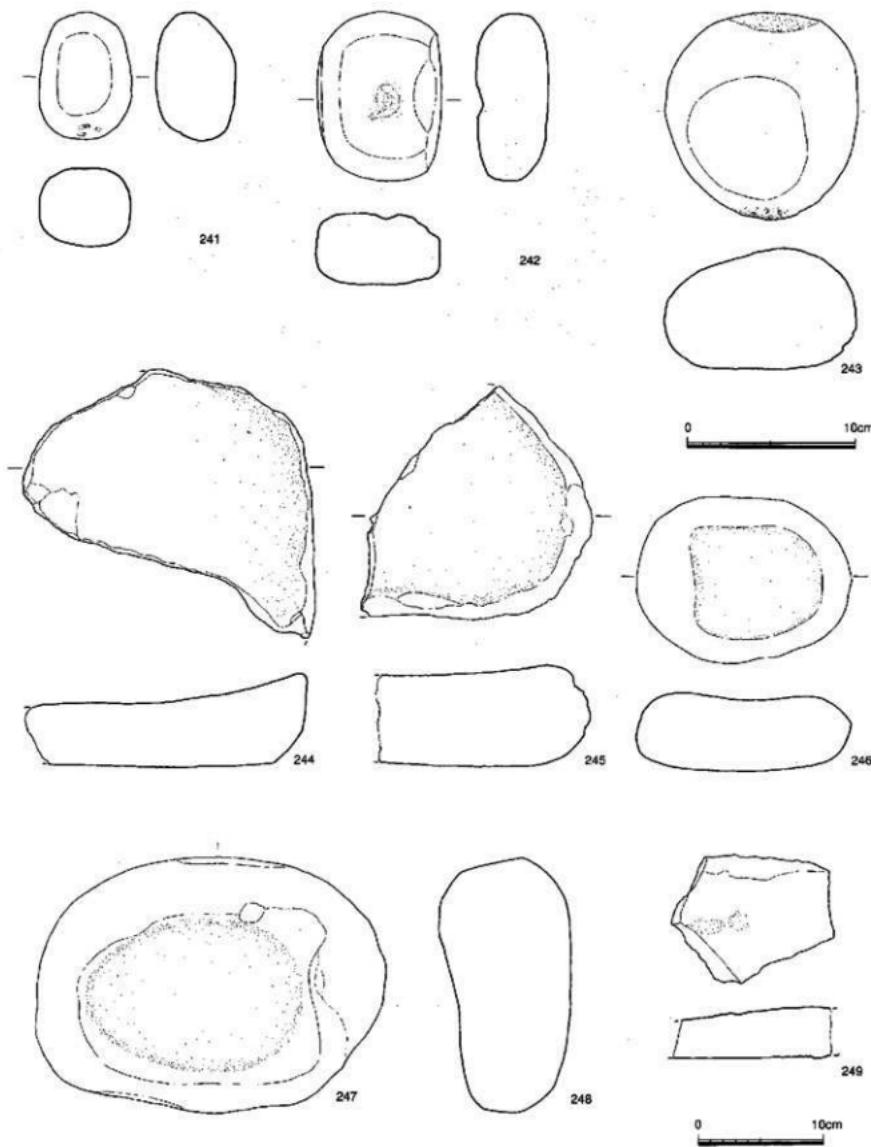


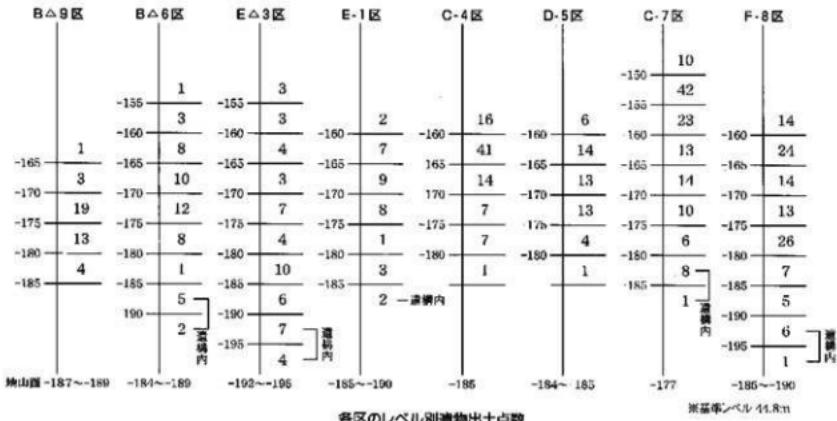
図21 出土石器実測図10 (1/3,1/4)

5 遺物の出土状況

出土した遺物については原則としてすべてドットを落とした。しかし出土量が多かったため、その日の内に上げられず、翌日の雨で流れた遺物もある。また掘下げ中に原位置を離れたものもあり、それらについてはグリッドが明らかなものはグリッド名のみを記した。グリッドから出土した総量は土器が4366点、剝片チップが830点、利器が165点であるが、実際には当然、若干の誤差がある。出土した遺物はこれらグリッド別に取り上げたほかにも、包含層出土として取り上げたものが約300点ある。出土した土器片のほとんどは細片・小片であるが、B-3区ではほぼ半個体の土器と別の大形破片がまとまって出土した。他にも大破片が出土したグリッドがある。出土層位は包含層周縁を除いてほとんどが第6層である黒褐色シルト層である。以下、項目別にグリッド別出土状況を検討する。

(1) 全体の出土状況及び遺構内出土状況

表1はドットを落とした土器出土点数、表2が全剥片の点数で、表3が全石器点数である。土器の集中部分と剝片の集中部は概ね近いものの、必ずしも同じでないことがわかる。出土遺物のレベルは明示していないが、概ね各包含層の上～中層に遺物が多く、下層は少ない。下図は無作為で抽出したグリッドのレベル別遺物点数であるが、地山の上10cm前後は遺物がかなり少ない。C-7区では半分以上が上部での出土である。レベルの差による土器の差は基本的にはない。遺構内も状況も基本的に上記の傾向と変わらず、上層に遺物が多く、下層に少ない。図22は半完形土器が出土したB-3区の遺構図(SK-102)及び遺物ドットである。床面直上から最下層にはほとんど遺物がない。地山はやや硬めではあるが、砂層であるため遺構の放置後、下部がすぐに埋もれたものと思われる。また図23はE-7区周辺の遺構図及び遺物分布ドットであるが、遺構内には多くの遺物が分布しているが、遺構を外れると極端に遺物が少なくなる。なお図のAは人疊まじりの黄色土が入った穴であるが、これは前述の上層から掘り込まれた自然穴と考えられ、遺物は1点も出土していない。繩文層から唯一出土した押型文土器は同様の穴から出土しており、その穴からは押型文土器1点以外は遺物は出土していない。遺構は前述のように、最終的には地表面で検出したが、B-3区SK102や図23の遺構群は包含層上面でばんやりと確認している。ドットの垂直分布を見れば、包含層上層から遺構内に遺物が分布していることがわかる。おそらく多くの遺構が包含層上面から掘りこまれているのではないかだろうか。すると、包含層がどういう風に形成されたかが問題になる。



当遺跡の地山はやや固めの砂層であるが、当然生活時には腐食層が極っているはずである。包含層はその腐食層ではないだろうか。遺物が下がることは鹿児島県石峰遺跡の報告書にあるとおりである。当遺跡は砂もしくは砂質土のため、根や小動物・昆虫によらなくても、下へ遺物がもぐる可能性は高くなるであろう。包含層の上・中層に遺物が集中するのはそのためではないだろうか。もちろん包含層の上部は生活中の堆積土、あるいは遺跡放棄後の堆積土であることも考えられるが、土層断面では分けきれなかった。SK102も包含層上面でうっすらと梢円形のプランを確認しており、柱穴は確認できなかったものの、遺物の集中度を考えると、住居址の可能性が考えられる。砂層に掘り込まれた遺構であることを考えると、壁面や床面が斜めであることは不思議ではない。

(2) 上器の分布状況

土器点数（表1）

井戸やマンホールによる搅乱のある区を除いて、ほぼ満遍なく遺物が出土しており、極端な粗密は何いにくいが、A△9区、D△3区、D4区、C7区の4カ所周辺が遺物点数が多く、1グリッド150点を超える周辺グリッドも100点前後出土している。

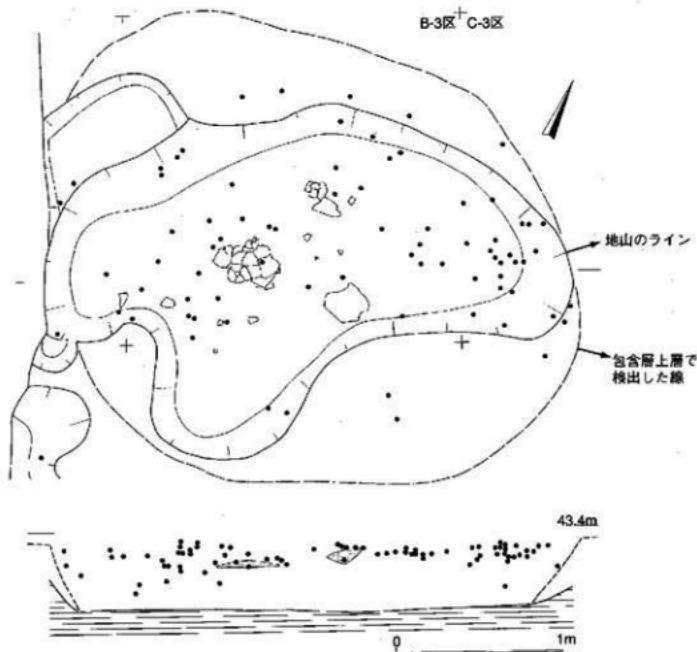


図22 B-3区検出遺構と遺物出土ドット (1/30)

土器面積

土器の破片は同じ1点でも大きさが異なる。破片の大きさは土器の割れ方や土器の流れ方、あるいは廻棄の仕方が影響していると考えられる。例えば完形品をその場に置く、もしくはその場で割ってその後に流されなければ、その場所には大きな破片が密集することになる。そこで各グリッド別の土器の表面積を出してみた。土器面積の出し方は、方形・長方形に近いものは縦×横、三角形に近いものは縦×高さ÷2、定型でないものは、四角や三角に割って足したが、もちろん誤差はあるが、誤差は1割程度ではないかと考えている。

川土した上器の総面積は21,333cm²である。ちなみに直線的な体部を持つ尖底土器の表面積は、土器を縦方向に切り開いた扇の面積で、口縁部直径20cm、側面の長さ30cmの尖底土器は表面積941m²である。当遺跡出土の撫糸文土器は若干胴部が膨れるものが多いことから、表面積は若干増える。口径が復元できた1・2の上器は約1,870cm²である。実際は口径の復元できないものもあり、出土土器の総面積を出すためには各個体の口径と高さ、土器の総個体数がわからなければならない。調査区内で出土した土器の個数を求めるのは、出土土器のはほとんどすべてが撫糸文土器であることから容易ではない。ちなみに、底の一一番底の部分が残っている破片は8点あり、さらに尖底の頂点のすぐ近くの破片まで入れると10点前後になり、これらは相互に接合しないため、少なくともそれ以上の数の土器がこの地区にはあることになる。ちなみに総出土土器面積は15~20個体分になり、当然個体数はそれ以上になる。

各グリッドから出土した土器面積は表2のとおりである。また、これを出土土器点数で割った値、すなわち各グリッドにおける土器片1点あたりの面積は表2÷表1で求められる。土器面積を見ると、半個体以上の土器が出土したB-3区が群を抜いて多い。土器点数の多かった4カ所はほぼ500cm²か、それ以上を測り、グリッド別ではB-3区を除いてもっとも多いグループである。

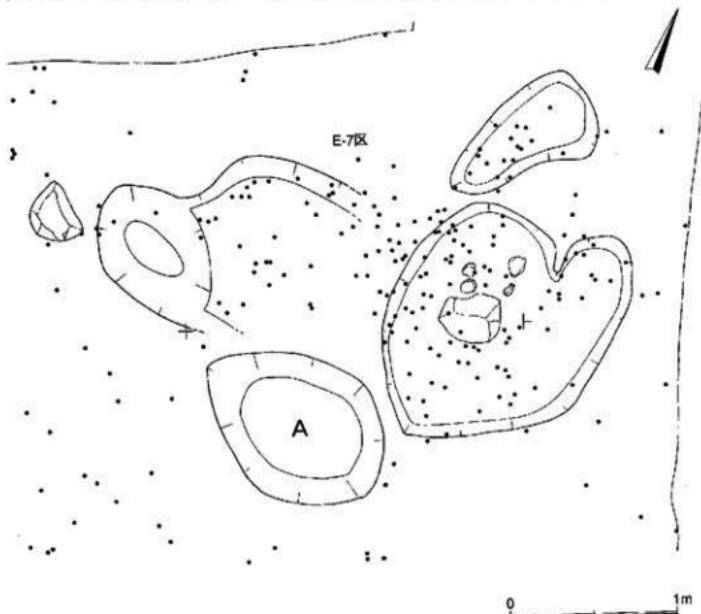


図23 E-7区周辺遺構及び遺物出土ドット (1/30)

上器の接合関係

今回出土した土器片は、まず同じグリッド内で接合を試み、次に隣の8グリッド、さらにその隣という風に各グリッド出土土器の接合を行った。しかし、別のグリッドと土器片が接合したのは極めて少なかった。その最大要因はほとんどすべてが撚糸文土器で、しかも文様の状況も良く似た土器が多くいたためではないかと考えられるが、さらにいくつかの要因が考えられる。もっとも遠かったグリッドは9の土器で、B-9区とD-4区である。B-9区では最上層からの出土で、D-4区ではほぼ中層からの出土、B-9区の方が包含層自体が高いが、両者のレベル差は約40cmある。同一グリッドからの出土でも6の土器は上下20cmのレベル差がある。

底部と口縁部(表3)

尖底土器であるため、底部の数は遺跡内における最低の土器個体数を表している。尖底の先端部を有する破片はすべて実測・掲載しており、その数は8点である。先端部すぐ近くの破片も含めた出土地区は表3の通りである。また口縁部は各区からほぼもれなく出土している。

外面条痕文土器の出土レベル

詳細は遺物の項で述べているが、裏面に撚糸原体を使ったと考えられる条痕を施した土器は少なくないものの、明らかに原体条痕とは異なる条痕文と考えられる文様を表面に施した土器が5000点中わずか数点出土した。57はほぼ最上面の出土、76も最上面、77も上面から10cmあたりの上層出土である。84は中程やや上よりの出土である。従って、条痕文を施したもののはいずれも上層あたりから出土している。ただし前述のように出土土器の大半が上・中層から出土していることと、条痕文の絶対数が少ないことから、これのみでは撚糸文より新しいとは言えない。

(3) 石器の分布

剥片点数等(表4)

各グリッド毎の出土剥片点数は表4のとおりである。ほぼもれなく出土しているが、両谷側近くは出土量はぐっと減り、生活域と考えられる調査区中央近くが多い。これに石核の出土地点を挙げると、黒曜石がD4区、E△3区、安山岩がC△7区、△△9区である。一方石器失敗品はE△2区、D3区、B3区、D△4区、C2区、D8区などである。出土位置はともにかなりばらつきがあるが、比較的剥片等の出土数の多いところである。本来ならば石の接合を行い、この分布と重ね合わせるべきであるが、今回は成しえなかつた。

石器点数(表5)及び石器欠損部位(表6)

もっとも出土量の多い石器は包含層のある部分からはほぼ満遍なく出土している。ただし、B3区で製品5点、失敗品1点の計6点も出土している。特徴的なのは谷部に近いB△9区、B△10区、C△9区であわせて8点も出土していることである。B△10区は土器も100点以上出土しているが、上器面積は小さく、土器片1点あたり3cm²に満たないという小ささである。ただしこの8点の石器のうち4点は欠損している。この地点のやや中心部よりの△6・7区では5グリッドから9点の欠損石器が出土している。地山の砂層はこの付近から南側は赤色粘土が混じって不安定となり、遺構も不定形なものが多い。あるいは生活域の端である谷部分に廃棄したとも考えられる。

(4) 小結

以上いくつかの項目別の遺物分布を掲示したが、今回はさらに詳細な検討を行うまでに至らなかつた。今後縄文時代の調査・報告では、様々な角度から生活復元のための資料を掲示する必要がある。今回はその一方法として不十分ではあるが、行ってみた。欠かせないのはドットと七層の分析及び全遺物の観察である。十分な時間と気力が必要である。

	A	B	C	D	E	F	G
16				1			
15			8	10			
14		21	2	6	7	3	2
13	3	1	1	0			
12	0	1		4			
11	4	5	2	2			
10	1	17	13	0			
9	1	5	2	2			
8	1	35	37	69	51		
7	10	75	175	56	30		
6	6	40	43	32	60		
5	6	25	47	62	35		
4	2	20	85	122	75		
3	2	63	33	71	35	12	
2	3	2	35	1	25	14	
1	22	1		2	20	7	
0	6	3		18	39		
△1	1	1	65	17	52	49	10
△2	37	101	23	115	61	1	
△3	63	45	102	138	107		
△4	65	23	47	113	27		
△5	1	17	26	30	52	61	
△6	11	62	70	35	40	17	
△7	15	62	35	44	4	0	
△8	20	51	70	54	8	2	
△9	56	150	85	49	17	0	
△10	8	115	14	30	0		
△11		25	5	28	3		
△12							
	Z	A	B	C	D	E	F

表1 グリッド別出土土器点数

	A	B	C	D	E	F	G
16			4			4	
15					40	39	
14			62	8	54	12	59
13		18	14	3			
12			11		25		
11		63	49	10			
10		20	173	95	81		
9		11	109	18	25		140
8		23	113	122	242	232	709
7		17	262	643	253	133	234
6		11	97	201	71	316	46
5		17	24	215	239	150	125
4		2	28	489	480	463	23
3		13	1605	183	278	137	36
2		20	4	70	2	61	16
1		82	1		3	44	33
0		20	21		358	137	
△1		45	115	57	248	169	11
△2		202	753	82	355	251	1
△3		249	138	625	552	374	
△4		231	25	419	463	112	
△5	1	67	47	129	207	188	
△6	100	211	171	231	210	101	
△7	60	292	125	191	4		
△8	78	227	266	452	40	19	
△9	219	615	481	265	35		
△10		32	296	67	55		
△11		36	23	78	12		
△12							
	Z	A	B	C	D	E	F

表2 グリッド別出土土器面積 (cm²)

	A	B	C	D	E	F	G
16							
15							
14							
13							
12		1					
11	1	1					
10					1		
9	1	1					
8	2	2	2	2	1		
7	1	3	5	1			
6	2	1	1	3			
5	2	5	1	3			
4	8	3	1	3			
3	3	2	3				
2		1			1		
1	1						
0		2	1				
△1	1	1	3		1		
△2	9	1	3	2			
△3	3	4	4	5	4		
△4	1		4	6	2		
△5		1	2				
△6	6	5	2	3			
△7	2	4					
△8	5	4	2				
△9	8	12	4				
△10	1	2					
△11							
△12							
	Z	A	B	C	D	E	F

表3 グリッド別出土口縁部・底部数

	A	B	C	D	E	F	G
16							
15					0/1		
14							
13							
12	0/1	1/0	1/0	1/0			
11	3/1	1/0					
10	1/0	1/1					
9	1/1						
8	4/4	5/3	3/4	11/3	11/7		
7	2/1	16/5	17/7	8/4	14/7		
6	6/2	5/8	14/5	6/6	1/0		
5	0/1	4/0	9/4	12/6	2/6	1/0	
4	1/1	6/4	4/4	14/7	10/0	6/2	
3	1/0	4/1	11/7	7/6	0/3	1/0	
2	0/0	11/0	9/0	16/0	0/3	1/0	
1	1/2	1/1	2/1	3/2			
0				4/2	2/0		
△1	3/6	4/7	5/2	2/2	0/1		
△2	2/2	5/3	2/5	4/2	10/5		
△3	7/4	4/9	5/6	2/2	12/9		
△4	3/3	3/1	2/2	3/6	5/1		
△5	4/5	1/5	8/0	2/2	4/3		
△6	0/1	15/8	9/11	5/4	10/5	1/0	
△7	1/2	2/2	1/2	4/4			
△8	1/2	4/2	4/2	3/3	5/4		
△9	3/3	3/6	7/4	5/6	1/0		
△10	1/1	5/4	4/0	1/1	0/0		
△11	0/1	3/2	4/2	4/0	1/1		
△12							
Z	A	B	C	D	E	F	

表4 グリッド別剥片出土数(OB/AN)

	A	B	C	D	E	F	G
16							
15					1		
14							
13							
12				1			
11							
10				1			
9				1			
8					1		
7	7/1		1/2		1/3		
6			2/1	2			
5				1			
4				1	1		
3			5/3				
2				2			
1				1			
0					1/1		
△1		1/1	2/1	1/1	1/1		
△2			1/1	1/2			
△3			1/1	1/1			
△4			1/1				
△5			4/1				
△6			1/1	3			
△7			3/1	1/1			
△8				1			
△9				3/2			
△10				3			
△11							
△12							
Z	A	B	C	D	E	F	

表5 グリッド別出土上石器数

	A	B	C	D	E	F	G
16							
15				A			
14							
13							
12				A:G			
11							
10							
9							
8							G
7							A:A
6				D:E			
5				B	A'		
4							D
3							
2							
1							
0							A:F
△1							
△2							
△3							C
△4							C:A'
△5							
△6							CA' AA'
△7							AD CA A
△8							
△9							B AB
△10							A
△11							
△12							
Z	A	B	C	D	E	F	

表6 グリッド別欠損石器

6 まとめ

遺構・遺物・遺跡について、項目毎にまとめる。

(1) 出土土器の特徴と編年的位置づけ

当遺跡出土の撚糸文土器は從来の出土例がほとんどないことから、諸特徴を他遺跡例と比較することによって年代的位置づけを行う。撚糸文土器の特徴を再度まとめるに、次のとおりである。

①器壁が厚い。多くの土器が1cmを超えて、1.2~1.4cm前後が最も多い。1.5cm以上も少なくない。

②脆い。水洗い時に崩れる、もしくは溶けるものもある。バインダーにつけないともたない。

③胎上が粗い。3~5mmの大石英等をかなり多く含んでいる。

④外面文様は斜方向に走る。ただし原体を横か縦に回せば、斜め施文になる。

⑤撚糸原体を横に滑らせたと思われる条痕文がある。また口唇部に原体を押圧しているものがある。

⑥直線的な尖底・乳房状・丸底気味尖底があり、同一形態ではない。

⑦肩部上半はやや屈曲し、口縁部はいくつかの形態がある。

⑧粘土の接合部がわかりやすい。擬口縁ができやすい。粘土帯幅は概ね3~4cm前後である。

①~③については、口縁部に連続刺突を施した土器、いわゆる刺突文土器（柏原式）に極めて近い。本報告であるが、福岡市大原遺跡15地点や元岡遺跡で出土した刺突文土器と比べると、器壁の厚さ・器面の脆さは当遺跡出土土器に近い。また大原15地点の土器では無文土器と条痕文土器が出土しているが、底部形態を比べると、大原遺跡はいわゆる乳房状尖底を主体としているのに対し、当遺跡のものは乳房状に近いもの（66・72など）の他、直線的なもの（68・69）も存在する。⑤の特徴についても同様に大原・元岡例に近い。⑦については、両遺跡は現在整理中のため明らかではないが、福岡県筑紫野市原遺跡例を見ると、端部が外反する外傾口縁が多く、当遺跡の48・54などに近い。ただし原遺跡は器壁1cm以内のものが大半である。条痕も横走施文が多い。柏原遺跡のものは厚手と薄手の両者がある。口縁部形態は原遺跡近い。当遺跡の口縁部形態のバリエーションが時期的な差か、単に個体による差なのかはわからないが、刺突文土器と同様の口縁部があることは重要である。2点ある山形口縁については、大分県稻荷山遺跡出土の無文土器に類似がある。同遺跡のものは山形の下に孔が空き厚くなっているが、平面的な形態はほぼ同一である。底部の立ち上がり角度の差については、完形品が無いため明確ではないものの、大形土器と小形土器による違いの可能性が高いと思われる。15・16などの小形土器は、よほどすぼまる器形でない限り、狭い底部が考えられる。

一方撚糸文土器の文様については、ほとんどが無筋の撚糸文と思われるが、原体等についての詳細な考察までにはいたらなかった。ここではいくつかの特徴的なことについて述べる。口唇部に押圧した撚糸文について、距離は圧倒的に離れているため直接的な比較対象にはならないが、関東の初期撚糸文に同様の文様が認められる。また稻荷山遺跡は、口唇部に押形文原体を押捺した例が報告されている。内面に多く施される横方向の条痕文は、本文中にあるように撚糸原体を横方向に引っ張って付いた原体条痕と思われるが、やはり稻荷山遺跡には押形原体による条痕が報告されている。

器壁の厚さや脆さは押型文土器と一線を画するものであり、上記の点からすれば、刺突文土器に近いと考えられるが、明確な乳房状尖底の多い大原遺跡に比べると当遺跡は後出する要素である。当遺跡の撚糸文土器とほぼ同様な撚糸文土器と刺突文土器・押型文土器が層的に出土した元岡遺跡では、撚糸文土器は刺突文土器の上から出土しており、上記の類推を傍証している。元岡遺跡では撚糸文土器の上は縁層を挟んで稻荷山から早水台前後の押型文土器が出土している。当遺跡も点数が少ないとは言え、上層からと縁層を掘り込んでいる穴から押型文土器が出土している。

①『原遺跡』1994 福岡県教育委員会

②『稻荷山遺跡発掘調査』1980 大分県教育委員会

以上から、当遺跡の撲糸文土器は、刺突文土器以後、古式の押型文土器以前または併行期にあたるということができる。刺突文土器に近い要素が多く、押型文との差が大きいことを考えれば、押形文出現以前と考えるのが妥当であろう。

当遺跡内の形態差や文様差について、さらに詳細な時期的検討等は、元岡・大原の報告書が出た段階で、検討できるであろう。他地域との併行関係については本稿の目的とするところではないが、前書でも簡単に触れた大分県二日市洞穴^①と比べると、同洞穴では第3～6文化層に尖底土器がある。第6文化層は乳房状尖底が多く直行口縁である。こぶ付き土器があることからも当遺跡より古いと考えられる。一方第3文化層と第4文化層上層は押型文土器と薄手の無文土器の層で当遺跡より新しいと考えられる。從って第5文化層から第4文化層下層に当たるものはといえる。石器群は第5文化層ものが当遺跡のものと近い。

当遺跡出土土器について、綿貫俊一氏はすでに松木田式土器を提倡している。^②この前後の時期は主なものだけでも条痕文・撲糸文・押型文・無文とあるが、文様とは関係なく器形の変遷は比較的スムーズに導き出せそうである。今後大原・元岡両遺跡の報告書が出た段階で再整理が必要であろう。

(2) 土器の製作・使用についての若干の観察

本文中で述べたように、土器の接合部が明瞭なものが多い。擬口縁を成すもの、接合部にひびがはいっているものは一目瞭然であり、厚みの違いでもわかる。それによると、粘土帯の幅は概ね3～4cm、擬口縁は上につき、擬口縁の外側に粘土を伸ばしていることから、土器は底部から作っていることが判る。底部は尖底突端部と内面が剥離している例が多く、内面は粘土を維持して厚みをつけたと考えられる。施文はどちらから行ったか明瞭ではない。一方、土器の使用時に付いたと考えられる外側の煤はすべてが胴上部から口縁部についている。内面のこげまたは煤が付いているものは少ないが、概ね胴中ほどに付いているものが数例ある。また底部先端から5cm前後の外側は磨滅がひどい。以上を考えれば、従来言われているように底部を上に埋めて使ったと思われる。その結果火は胴中程にあたり、胴上部に煤が付いたものと理解できる。

(3) 出土石器について

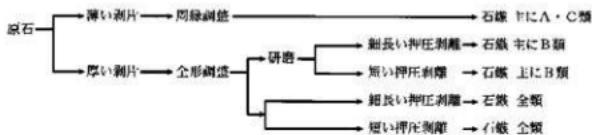
① 形態的特徴

出土した138点の石器は本文中にあるようにいくつかの形態に分かれる。一部の例外を除いて、大別3類、小別はさらに各類が2～3に分類できる。これらの内もっとも多いのはB類で、全出土点数のうち59%を占める。B類の形態的特徴は細身であることと、両側縁が直線的であることである。さらに全体的な形態的特徴として“大きさ”があげられる。細身であることは、局部研磨が川土した柏原F遺跡Ⅲ層でも同様である。石器の長さは、全石器平均長18.29mm、A類平均19.59mm、B類平均18.35mm、C類平均16.665mmで、2cmに満たない。“大きさ”自体は決して縄文時代全般を通して珍しくはないものの、3cmを越える石器が皆無であることは特徴的である。

② 石器の製作工程と局部磨製石器について

全石器中、磨製石器の占める割合は44%である。さらに研磨部分をその後の調整で完全に取ってしまったものがある可能性が高いことから、研磨を施した石器の本来の割合はさらに高いと考えられる。研磨痕には、剥離を切るものと、切られるものが存在する。圧倒的に後者の率が高いが、少なくとも前者は3点確認できた。研磨の多く残っている石器は最後の周縁調整はやや短めの押圧剥離を施している(168・186など)。一方、研磨痕が認められない石器は2タイプある。ひとつは長い押圧剥離を全面に施しているもの(158・164など)、もうひとつは最終剥離面が残っているもの、いわゆる剥片器に分類できるもの(196・197など)である。後者については片面に剥離面を残しているが、
①『二日市洞穴』別府大学 1980
② 綿貫俊一「九州の縄文時代草創期から早期の上部編年に関する一考察」『古文化研究』第42集 1999 九州古文化研究会

もう片面に研磨を施しているもの（104・115など）もある。一方、石器用と考えられる剥片を創出したと考えられる石核を見れば、各方向から剥片を剥出しており、様々な剥片が剥出されたと考えられる。以上を総合すると、比較的薄い剥片についてはそのまま周縁加工を中心とした調整を行って石器を作成し、片面もしくは両面が厚い剥片は研磨を加える。剥離に切られる研磨と剥離を切った研磨があることから、母岩から剥片剥出後にある程度形を整え、その後に研磨を加えて、さらに押圧剥離を施したと考えられる。図式化すると次のようになる。



一番右の類分けは、あくまでも主にということであり、きっちり色分けはできない。これは本文中でも述べたように、本文類自体が線が明確に引けないことからも明らかである。上記の段階の内、一部については失敗品（木製品）が出上している。また丁寧な押圧剥離を良く観察すると、調整の順番がわかるものがある。

局部磨製石器は、当該地区ではすでに大原F遺跡第5地点の条痕土器の時期からすでに出現している。量的には少なく、ごく一部を占めるのみである。これに続く時期と考えられる刺突文土器の時期には増加している。さらにそれに続く当遺跡では約半数を数えるに至る。柏原F遺跡第II層の初期押型文期には激減してしまう。当遺跡では、最終的な形ではほぼ全面を研磨しているものはないが、柏原F遺跡にはごく一部を除いたほぼ全面研磨が認められるものが存在する。近年、鹿児島で出上している全面研磨の石器との関係など、磨製石器一つとっても問題点が多い。

③ 石器の欠損率について

全石器中欠損しているものの割合は45%である。しかしこれには使用可能もしくは再生可能なごく先端部の欠損も含まれており、片脚全体の欠損や全体の1/3以上:の再生不能と思われる欠損率は35%ほどになる。柏原F遺跡の場合は、もっとも欠損率の少ないII層でも55%の欠損率である。柏原E遺跡では66%になる。いくつかの手元にある報告書を広げると、鹿児島県石峰遺跡は欠損の記述が図でわからないものがあるが、確実なところでは4b層は30%と低いが、10点しか出上していない。4a層が59%、3a層は75%と高い。筑紫野市原遺跡は早期以外が若干混じっている可能性があるが71%である。当遺跡の場合、石器のうち半数以上に欠損がなく、さらに6割以上が使える石器である。しかも絶対量が極めて多い。ごく小さい石器は移動に際して当然持つていいける品目であるが、使える石器が大量に遺棄されている理由は何であろうか。住居の可能性も考えたSK102では6点もの石器が出上している。祭祀構造でもない当遺跡の場合、本来遺跡に残らないはずのものが数多く残っている理由はわからない。

（4）出土石器及び遺構・立地等から見た遺跡の性格

出土した定形利器の内、実に9割以上が石器、ポイントである。次に多いのがスクレイパーである。すなわち狩猟に関する道具が圧倒的に多い。ただこれだけでは、狩猟用のキャンプ地と言うことは出来ない。生業や集団行動の季節性等は、広い地区的遺跡を比較することによって初めて理解できるからである。ここでは、その他にこれらを考えための特徴を挙げる。まず、石器の製作を行っていること。10点以上の失敗品と石核の存在がこれを証明する。さらに石組み炉の存在、あるいは住居の存在する可能性もある。立地的には、山が近い平野の奥部で、川もすぐ日の前にある。地山が砂でやや

不安定であるが、尾根上に伸びた上に遺跡はあり、水はけ等も問題ではなく、居住城としては好立地と言えそうである。大原遺跡や元岡遺跡は一見岩陰状の立地であり、当遺跡とは立地が根本的に異なっている。その差異がどこにあるか、現時点では明らかではない。もう1点気になるのは石斧の不在である。大原15地点では丸ノミ状石斧等が出土しているが、本遺跡ではかけらも確認できなかった。石斧が単に壊れなかったため、遺棄されなかったとも考えられるが、土器量や狩猟具の量の多さから見て違和感がある。ただし幅約8mの調査範囲であり、遺跡全体の全貌は不明のままである。調査範囲が狭い割には土器も多い。本文中にるように底部先端の数が8個体、口縁部からはおそらく20個体前後もしくはそれ以上があると思われる。これが同一時期もしくは近い時期に廃棄されている。土石流で集落が埋まったということは次の点で考えにくい。ひとつは、疊層の下にシルト層があること、もう1点は2基の石組炉が石を抜かれているからである。推測できるのは、ここがベースキャンプとして1年内の核となる場所で、毎年訪れた場所であった場合であるが、やはり石斧の不在と完形石器の多さが理由がつかない。今後の課題である。

おわりに

福岡市では、ここ数年縄文時代初期の遺跡が相次いで発見された。本書はその最初に出る報告書である。平成8年度末に調査して以来、すでに4年の歳月が過ぎ去ったが、その間も別の現場・報告書に追われ、この遺跡の整理を充分かまうことができなかつた。出土品の整理にあたっては、土器が難かっただため洗浄と保存処理に時間を費やされた。また接合をする主戦力は縄文土器に慣れていない福岡市の女性達であり、そのすべてが燃系土器であることからも、自ずから限界があったものであろう。本当に別グリッドとの接合がこれだけしかないか疑問が残る。筆者が実際に細かい文様等の観察ができたのは、本年度になってからのことである。剥片の接合にいたっては、まったくできなかつた。総数5000点を超える脆い遺物・多くの剥片や上器片の観察には、充分な時間と費用がかかるのであらためて知った次第である。報告書とは基本的に発掘調査から得られた事実の報告であるが、その責を果たしたか一抹の不安が残るが、上記の点を考慮頂き、ご寛容頂ければ幸いである。

それでも、本文中に述べたように、弥生文化の地福岡における当遺跡の重要性は大きなものがある。本文中で述べたいつかのことはもとより、前書のまとめで触れたように、特に大きな成果は、従来確認できなかつた神積地の下部に縄文時代初期の遺跡が眠っていることがわかつた点である。当遺跡も調査当初は弥生・古墳時代の住居址群がある上層（土石流層の上）のみの調査予定であった。たまたま平安時代の井戸が下層をぶち抜いていたため、下層文化層を見つけることが出来た。大原D遺跡・元岡遺跡においても、当初から縄文時代の遺跡があることがわかつたわけではない。十分な調査期間と整理期間をとるためにも、今後はこれらの遺跡の立地を詳細に検討し、開発審査の段階である程度予測が付けられるようしなければならない。先年、弥生時代の石斧製作址で有名な今山遺跡を調査する機会に恵まれた。今山の東麓、現海岸線のすぐ西側である。予想通り大量の石斧未製品とチップが出土したが、さらにその2~3m下に完形品を含む森・曾煙式土器の文化層があった。一畠ドでわずか20m²という調査であったが、縄文時代遺物だけでコンテナ20箱を越える量であった。これも偶然の発見であったが、沖積地の調査においては、可能な限り下の確認を行うことの重要さを松木田・今山の両遺跡の調査から実感した次第である。

最後ではあるが、石器の一部の実測を行っていたいたいた当市の横山邦維氏、藤祥子氏、前書で大きな協力を賜った熊本大学小畠弘己氏、さらには石器全般についてご教示賜った当市の山口謙治氏、きたない筆者の石器図面をきれいな図に淨書していただいた山口朱美氏に感謝申し上げたい。

表7 掘載土器一覧

番号	部位	外面	燃系幅 (mm)	内面	留厚 (cm)	法量 (cm)	出土区・No.	レベル	備考
1	口縁	右下燃系	1~1.5	ナデ(磨滅)	1.4	口径34.1	D-0~14.15	174	
2	肩部	右下燃系	1~1.5	ナデ(磨滅)	1.3		D-0~14.16	176	
3	底~胴	右下燃系	2~3	ナデ	1.5	口径39.7	B-3		一括土器
4	口縁	右下燃系	3~4	指頭ナデ	1.1	口径20.4	D△3 45~47	169	
5	口縁	右下燃系	3~4	横原体条痕	1.2	口径19.9	C4-72,86		
6	口縁	右下燃系	2~4	ナデ	1.2	口径36.4	C△3-5,50,19	162~180	
7	口縁	右下燃系	2前後	横燃系条痕	1.4	口径34.9	C△3-8,C△-10	175	
8	口縁	右下燃系	2前後	ナデ	1.4	口径37.8	SK105-3,32		
9	口縁	右下燃系	1~1.5	指頭ナデ	1.6	口径38.0	B9-1~3,D4-122	148~188	
10	口縁	右下燃系	2前後	ナデ	1.2	口径23.4	B△2-24,36	153~170	山形が付く
11	口縁	右下燃系	1~1.5	横燃系条痕ナデ	1.1	口径28.0	E4-72	180	
12	口縁	右下燃系		ナデ	1.4	口径31.0	B△2-36		山形が付く
13	口縁	横燃系条痕?	2~3	横(燃系?)条痕	1.0	口径17.4	C4-72,86	167~179	
14	口縁	右下燃系	1.5~2	横(燃系?)条痕	1.0	口径14.3	E5-42	187	
15	口縁	右下燃系	1前後	ナデ	1.1	口径12.1	C△3-7	164	
16	口縁	右下燃系	1.5~2	横燃系	1.1	口径12.1	C4-69	156	口唇部文様
17	口縁	右下燃系	2前後	指頭ナデ、ナデ	1.0	口径31.8	B3区-括		
18	口縁	右下燃系	2前後	横燃系	1.0	口径35.2	B3区-括		
19	口縁	刺離	1.5	横(燃系?)条痕	0.8		B△9-43	173	口唇部文様
20	口縁	右下燃系	1前後	横燃系条痕	1.0		C4-69	167	口唇部文様
21	口縁	横燃系	1~1.5	指頭ナデ	0.9		D-3区		
22	口縁	右下燃系	1.5~2	指頭ナデ	1.1		Z△9-22	188	
23	口縁	右下燃系(ナデ消)	1前後	ナデ	1.1		C△9-20	174	口唇部文様
24	口縁	右下燃系	2前後	横燃系条痕	0.9		C△8-43	175	口唇部文様
25	口縁	右下燃系	3前後	横燃系条痕	1.0		F8-4	165	
26	口縁	右下燃系	2前後	ナデ	1.1		B△2最下層		
27	口縁	右下燃系	2~3	ナデ	0.9		B△2-35	161	
28	口縁	右下燃系	1~1.5	やや右下燃系	0.9		B3区-括-2		
29	口縁	右下燃系	2~2.5	ナデ	1.2		F9-1~3	179	補修孔
30	口縁	右下燃系	1前後	ナデ	1.3		B△9-3	151	
31	口縁	右下燃系	2~3	横燃系	1.2		A△9-14	234	
32	口縁	右下燃系	2.5~3	横燃系	1.2		A△6-18	163	
33	口縁	横燃系	2~3	指頭ナデ	1.1		Z△9-25	192	
34	口縁	右下燃系	1~1.5	指頭ナデ	0.9		D3-9	164	
35	口縁	右下燃系	1.5前後	指頭ナデ	1.5		D△6-9	185	
36	口縁	右下燃系	1.5前後	ナデ	1.7		F8-SK103		
37	口縁	右下燃系	1.5前後	ナデ	1.3		SK118		口唇部文様
38	口縁	右下燃系	1.5前後	横燃系条痕、ナデ	1.1		C△6 11,13	174	口唇部文様、波状?
39	口縁	右下燃系	1.5~2	ナデ	1.4		C△3 36	188	
40	口縁	右下燃系	1.5前後	横(燃系?)条痕	1.2		E2-16	192	
41	口縁	ナデ、右下燃系		ナデ	1.0		F6-5	177	口縁端粘土帯あり
42	口縁	右下燃系	2前後	横燃系?	1.0		B△2最下層		
43	口縁	右下燃系	1~1.5	ナデ	1.0		C△3-58	200	
44	口縁	右下燃系	1以下	左下燃系	1.2		C7-117	185	
45	口縁	右下燃系	1強	横燃系	1.4		C3-6	153	
46	口縁	右下燃系	2前後	ナデ	1.0		SK117-1		

番号	部位	外面	燃糸幅 (mm)	内面	燃厚 (cm)	法量 (cm)	出土区-No.	レベル	備考
47	口縁	右下燃糸	2前後	ナデ	1.2		A△9-2	172	
48	口縁	右下燃糸	1~1.5	ナデ	0.9		C△4-29	183	
49	口縁	右下燃糸	1.5前後	ナデ	1.2		SX101		
50	口縁	右下燃糸	1.5前後	ナデ	1.5		A11-3	142	
51	口縁	横・右下燃糸	1以下	ナデ	1.5		△△3-11	160	
52	口縁	右下燃糸	1前後	ナデ	0.9		D△6-SK		
53	口縁	右下燃糸	1以下	ナデ	0.9		C3-15		
54	口縁	右下燃糸	1前後	ナデ	1.1		C△4-33	182	
55	口縁	右下燃糸	1以下	ナデ	1.0		D△4-20	153	
56	口縁	右下燃糸	1以下	ナデ	1.0		D△4-30	175	
57	口縁	右下燃糸		横糸痕	0.6		C4-14	162	
58	口縁	右下燃糸		ナデ	0.7		E4-57	176	
59	胴下半	右下燃糸	2前後	ナデ	1.1		C6-16	162	
60	胴下半	右下燃糸	1~1.5	ナデ	1.2		C7-64	165	
61	胴下半	右下燃糸	2前後	ナデ	1.1		D△1-17	175	
62	胴下半	右下燃糸	1強	横燃糸後ナデ	1.1		C△3-2	161	
63	胴下半	纏糸	1強	ナデ	1.3		D△3-37,D△4-48	171~190	
64	胴下半	右下燃糸	2前後	ナデ	1.5		C7-76	174	
65	胴下半	右下燃糸	1.5~2	ナデ	1.1		F9-5-35	183	
66	底部		ナデ	剥離			D△9-47	172	
67	底部		ナデ				△△4-36		
68	底部	燃糸		ナデ			C4-74		
69	底部	ナデ		剥離			F6-46	175	
70	底部	ナデ		ナデ			C△3-18	157	
71	底部	燃糸		ナデ			△△4-10		
72	底部	燃糸		ナデ			B3-4,14	166~178	
73	底部	ナデ		ナデ			F8-24	168	
74	胴部	右下燃糸	1~1.5	ナデ	1.1		F8-93	183	
75	胴部	右下燃糸	1.5前後	ナデ	1.4		C7-69	160	
76	胴部	右下燃糸		横燃糸?条痕?	1.1		D△1-7	167	条痕は纏維状か?
77	胴部	右下燃糸		横糸痕	0.8		E△2-27		
78	胴部	条痕+燃糸	1.5前後	ナデ	1.6		Z△5-10		
79	胴部	右下燃糸	2.5~3	ナデ	1.6		SX108		
80	胴部	右下燃糸	2.5~3	ナデ	1.5		B10-5	149	
81	胴部	右下燃糸	1.5~2	ナデ	1.1		B3-3	152	
82	胴部	右下燃糸	1.5~2	ナデ	1.2				
83	胴部	右下燃糸		右下・横燃糸	1.0		D△3-51	166	裏上部縄文か
84	胴部	右下燃糸		横糸痕	1.0		D△2-29	181	
85	胴部	右下燃糸	1.5前後	ナデ	1.3		F7-40,50	185	
86	胴部	右下燃糸	2前後	ナデ	1.2		△△9-61	185	
87	胴部	右下燃糸	2前後	横燃糸ナデ	1.0		C△7-38,39	169	
88	胴部	右下燃糸	2前後	ナデ	1.5		E8-52	242	
89	胴部	右下燃糸	1.5~2	ナデ	1.7		E8-109,54	178~195	
90	胴部	山形押型文		ナデ	0.8		E6-35	177	
91	胴部	右下燃糸	1.5~2	ナデ	1.1		B3区-括14		

表8 出土石器一覧 「長推」と「幅推」の※マークは推定長、推定幅

器種	材質	長推 (mm)	幅推 (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出土区No.	磨製	欠損部位	挟り (mm)	挟り/ 長さ	型式	図 No.	備考
石刀	漆黒OB	12.8		11.1	1.2	2.7	0.4	C15-1	両面	片脚	1	0.08	A	101	
石刀	漆黒OB	13.3	※	11.0	1.2	1.6	0.2	D-0区		片脚	2	0.15	A	102	剥離面残
石刀	AN	14.9		10.4	1.4	2.4	0.5	E△1区			2	0.13	A	103	
石刀	漆黒OB	17.7		11.8	1.5	3.1	0.6	D△2-47	片面		2	0.11	A	104	剥離面残
石刀	漆黒OB	18.1		13.4	1.4	4.8	1.0	E-7-22	片面		3	0.17	A	105	剥離面残
石刀	漆黒OB	20.3		14.5	1.4	4.6	1.0	?			2	0.10	A	106	剥離面残
石刀	AN	19.6		14.2	1.4	3.2	0.9	A△6-8	両面		2	0.10	A	107	
石刀	漆黒OB	24.0	※	15.9	1.5	4.4	1.1	B△2-7	片面	先端	3.5	0.15	A	108	
石刀	AN(SN)	21.5	※	16.0	1.3	7.0	1.8	F-7K		片脚	1	0.05	A	109	本製品?
石刀	漆黒OB	19.4		14.2	1.4	4.2	1.0	B-9-1			0.5	0.03	A	110	
石刀	AN	18.0		16.8	1.1	2.2	0.6	B△4区			2	0.11	A	111	剥離面残
石刀	AN(SN)	18.1	※	16.5	1.1	3.4	0.6	C△6-33		片脚先端	1	0.06	A	112	
石刀	AN	22.4		16.9	1.3	4.4	1.3	C△6-8			2.5	0.11	A	113	
石刀	漆黒OB	20.9		18.8	1.1	3.3	0.8	C△1-11			0	0.00	A	114	
石刀	漆黒OB	19.9		16.9	1.2	2.5	1.0	SK102	片面		0	0.00	A	115	剥離面残
石刀	漆黒OB	24.0		19.4	1.2	5.6	2.4	D△5-14			0	0.00	A	116	
石刀	漆黒OB	17.2		15.3	1.1	4.3	1.0	SK102			0	0.00	A	117	
石刀	漆黒OB	16.1		17.0	0.9	2.9	0.8	Z-7-8			0	0.00	A	118	
石刀	AN	21.3		18.7	1.1	5.1	1.7	A△4-38	片面		1.5	0.07	A	119	
石刀	漆黒OB	24.7		14.7	1.7	2.6	1.0	F-7-9			1.5	0.05	A	120	
石刀	漆黒OB	27.2	※	20.0	1.4	2.6		C△9-10		片脚	1.5	0.05	A	121	剥離面残
石刀	AN							B△9-36		内脚			A?		
石刀	AN(SN)	12.9	※	10.5	1.2	2.0	0.2	C△5-9	片面	片脚	4	0.31	B	122	
石刀	透明OB	12.4		9.9	1.3	1.5	0.2	C-3-25	片面		3	0.24	B	123	
石刀	AN(SN)	14.2		9.7	1.5	2.2	0.3	C△1-10	両面		3	0.21	B	124	
石刀	漆黒OB?	14.0	※	10.0	1.4	1.8	0.2	E-6-45	片面	片脚先端		0.00	B	125	
石刀	透明OB	19.4		10.8	1.8	2.9	2.9	D△3-19		片脚先端	3.5	0.18	B	126	
石刀	漆黒OB	12.7		10.8	1.2	2.6	0.2	A△1-5			4	0.31	B	127	
石刀	AN	13.7	※	11.0	1.2	2.5		B△10-6		片脚	3.5	0.26	B	128	剥離面残
石刀	漆黒OB	15.0	※	10.3	1.5	2.3	0.2	B△3-20	片面	先端	4	0.27	B	129	
石刀	縫合OB	14.8		9.6	1.5	2.1	0.2	B-3-図X			5	0.34	B	130	
石刀	漆黒OB	14.9	※	10.8	1.4	1.3	0.2	C△6-5		片脚先端	4	0.27	B	131	剥離面残
石刀	漆黒OB	14.7		11.5	1.3	2.3	0.3	C-6-32	片面		5	0.34	B	132	
白骨	漆黒OB	16.3		8.8	1.9	2.0	0.2	C△8-5			5	0.31	B	133	
石刀	漆黒OB	14.7		10.9	1.3	3.0	0.4	D-6-14	両面		3.5	0.24	B	134	
石刀	AN(SN)	16.3	※	13.0	1.3	2.3	0.3	C△7-49		片脚	4.5	0.28	B	135	
石刀	漆黒OB	15.1	※	12.0	1.3	2.8	0.3	A△7-38	両面	片脚一部	3	0.20	B	136	
石刀	火燒OB	16.9		10.6	1.6	0.3	0.4	SK101			5	0.30	B	137	
石刀	漆黒OB	16.8	※	13.0	1.3	3.1	0.4	F-7-21		片脚	4.5	0.27	B	138	剥離面残
石刀	青灰OB	16.1		11.4	1.4	2.2	0.3	B△5-5	片面		5	0.31	B	139	
石刀	黒OB												B	140	
石刀	AN(SN)	17.5		12.1	1.4	2.5	0.4	B-7-89	両面		4.5	0.26	B	141	
石刀	青灰OB	15.4		11.4	1.4	2.7	0.3	A△7-26			4	0.26	B	142	剥離面残
石刀	漆黒OB	18.0	※	10.0	1.8	2.2	0.2	C△12-2	両面	片脚・先端	6	0.33	B	143	
石刀	漆黒OB	16.5		10.1	1.6	2.7	0.2	SK110-21			0.00	B	144		
石刀	漆黒OB	16.0		12.0	1.3	3.2	0.4	C△2-10			6	0.38	B	145	
石刀	漆黒OB	17.6		10.3	1.7	2.6	0.4	C-3-8			4	0.23	B	146	
石刀	漆黒OB	17.2		10.2	1.7	2.4	0.3	B-3-6	片面		4	0.23	B	147	剥離面残
石刀	漆黒OB	17.8		10.5	1.7	2.5	3.3	F-9-6			4	0.22	B	148	
石刀	AN	17.4		12.0	1.5	3.1	0.5	圓面A	両面		4	0.23	B	149	
石刀	黒OB	17.4		10.7	1.6	2.7	0.3	A-10-1	片面		6.5	0.37	B	150	自然面残
石刀	漆黒OB	19.0	※	11.3	1.7	2.4	0.3	B△6-27		先端・片脚先端	5	0.26	B	151	剥離面残
石刀	AN	18.1		9.0	2.0	2.4	0.3	D△1-16			4.5	0.25	B	152	剥離面残
石刀	AN	17.9		12.0	1.5	2.3	0.4	C-4-64	両面		4.5	0.25	B	153	
石刀	AN	18.4		11.1	1.7	2.2	0.4	B△10区	両面		5.5	0.30	B	154	
石刀	漆黒OB	18.6		12.3	1.5	2.0	0.4	SK102-1	両面		6	0.32	B	155	
石刀	AN	18.0		11.5	1.6	2.3	0.4	B△9-28	両面		5.5	0.31	B	156	
石刀	AN(SN)	18.7		11.5	1.6	2.0	0.9	C-3-53	両面		3.5	0.19	B	157	
石刀	青灰OB	18.2		11.6	1.6	2.9	0.4	B△9-15			4.5	0.25	B	158	
石刀	青灰OB	18.7		11.6	1.6	3.0	0.4	A△3-13	両面		4.5	0.24	B	159	
石刀	AN	19.6	※	12.0	1.6	3.1	0.4	SK114-2		片脚先端	5.5	0.28	B	160	

石歯	AN	※	21.0	※	10.0	2.1	2.1	D-8-16	両面	両脚先端	4.5	0.21	B	161	換り長椎牙	
石歯	青灰OB	※	19.1		11.5	1.7	2.5	0.4	D△11-59	両面		5	0.26	B	162	
石歯	漆黒OB	※	21.0		12.5	1.7	2.9	0.5	SK109	両面	先端	4	0.19	B	163	
石歯	漆黒OB		19.8		11.3	1.8	2.5	0.4	SK102-雑2			6.5	0.58	B	164	
石歯	黒OB							D-7-57	両面	先端					B 165	
石歯	漆黒OB		21.5	※	11.5	1.9	2.5	0.4	E△5-5	両面	片脚	6.5	0.30	B	166	
石歯	漆黒OB		20.5	※	12.0	1.7	2.2	0.3	E△8-36	両面	片脚	5.5	0.27	B	167	
石歯	漆黒OB		20.2		11.2	1.8	2.3	0.4	C△10-1	両面		5.5	0.27	B	168	
石歯	AN		20.6		10.8	1.9	2.1	0.4	A-0-1	両面		5	0.24	B	169	
石歯	AN		18.6	※	12.0	1.6	2.5	0.4	F-8-53	両面	片脚	4.5	0.24	B	170	
石歯	AN		21.0		13.2	1.6	3.2	0.6	SK105			5.5	0.26	B	171	
石歯	漆黒OB		21.9	※	13.0	1.7	2.4	0.5	A△2-36		片脚	5	0.23	B	172	
石歯	緋OB	※	22.5	※	11.0	2.0	2.5	0.4	D-0-32	両面	両脚	4.5	0.20	B	173	
石歯	透明OB							C△2-14	両面	両脚・先端					B 174	
石歯	漆黒OB		19.7		11.5	1.7	2.8	0.5	E-8-15	両面		5	0.25	B	175	
石歯	AN(SN)		20.1		10.1	2.0	2.9	0.4	C-3-30	両面		5.5	0.27	B	176	
石歯	漆黒OB		20.2	※	12.0	1.7	1.8		C-3-5		継半分	5	0.25	B	177	
石歯	漆黒OB		22.0		12.1	1.8	2.7	0.5	D-5-77			7	0.32	B	178	
石歯	漆黒OB		20.8		11.7	1.8	2.0	0.4	B△3X	両面		5	0.24	B	179	
石歯	AN		21.7		12.6	1.7	1.7	0.4	B△6-12	両面		6.5	0.30	B	180	
石歯	漆黒OB		21.7		11.7	1.9	3.2	0.5	SK114			6.5	0.30	B	181	
石歯	漆黒OB		22.8		12.3	1.9	3.0	0.6	B-4-26	両面		7	0.31	B	182	
石歯	AN	※	23.0		14.2	1.6	2.9	0.7	B-10-1			4.5	0.20	B	183	剥離面残
石歯	漆黒OB?		23.2		12.1	1.9	3.7	0.7	E-5-2	両面			0.00	B	184	
石歯	AN(SN)		27.0		16.0	1.7	3.6	1.2	C-3-7	両面		5.5	0.20	B	185	
石歯	漆黒OB		26.7	※	15.5	1.7	1.4	0.6	C△3-34	両面	片脚	7.5	0.28	B	186	
石歯	漆黒OB							E△1X							B	
石歯	漆黒OB							SK104	両面	下半分以上					B	
石歯	AN							D△2-42	両面	継半分以上					B	
石歯	黒OB	※	17.0		12.5	1.4	3.6	0.5	D-5-9		先端	4	0.24	B		
石歯	AN		16.8		10.6	1.6	2.3	0.3	B-3X	両面		6	0.36	B		
石歯	AN		16.8		12.6	1.3	2.7	0.4	拂土巾			6	0.36	B		
石歯	AN		17.5		11.7	1.5	2.9	0.5	D△2X	片面		5	0.29	B		
石歯	AN	※	16.0		11.1	1.4	2.6	0.4	D-7-57	両面		6	0.38	B		
石歯	AN		18.4		12.2	1.5	2.3	0.4	D△2-10	両面		5.5	0.30	B		
石歯	AN		20.0		11.1	1.8	1.7	0.4	SK111	片面	片脚先端	5	0.25	B		剥離面残
石歯	漆黒OB		18.2	※	11.5	1.6	3.4		D-6-11		片脚	4	0.22	B		
石歯	AN	※	19.3	※	12.5	1.5	3.1		D-3X	両面	片脚	5	0.26	B		
石歯	AN	※	16.5		11.9	1.4	2.1		D△9-1		H-1/3	5.5	0.33	B		
石歯	漆黒OB		17.9	※	12.5	1.4	3.0		B△3-21		片脚	4	0.22	B		
石歯	AN	※	20.2	※	10.4	1.9	2.6		DA-3-7		先端・片脚先端	4.5	0.22	B		
石歯	漆黒OB							D△1-14	両面	上1/3,片脚					B?	
石歯	灰黒OB		12.2		11.7	1.0	2.8	0.3	A△10-5			5	0.41	C	187	
石歯	漆黒OB		14.9		11.3	1.3	2.6	0.3	A△1-6			5	0.34	C	188	
石歯	AN		14.1		11.0	1.3	2.3	0.3	B△5-6			3.5	0.25	C	189	剥離面残
石歯	漆黒OB		14.6		10.5	1.4	3.2	0.3	A△9-55	両面	片脚先端	5	0.34	C	190	
石歯	透明OB		15.0		12.5	1.2	3.2	0.4	D-6-31			5	0.33	C	191	
石歯	漆黒OB		15.0		11.5	1.3	2.1	0.3	B△6-13			4.5	0.30	C	192	剥離面残
石歯	AN		15.3		10.5	1.5	2.1	0.3	B△10-5			4.5	0.29	C	193	剥離面残
石歯	漆黒OB		16.3	※	15.0	1.1	3.3	0.5	C-11-5		片脚	4	0.25	C	194	
石歯	漆黒OB		16.8	※	13.0	1.3	2.8	0.4	B△6-15		片脚	4.5	0.27	C	195	
石歯	漆黒OB	※	17.0		11.6	1.5	3.0	0.4	B△9-53		先端	3	0.18	C	196	剥離面残
石歯	AN	※	20.0	※	13.5	1.5	1.9	0.3	B△2-6		先端・片脚	5	0.25	C	197	剥離面残
石歯	漆黒OB		15.5		11.3	1.4	1.8	0.2	E△4-8	両面		4	0.26	C	198	剥離面残
石歯	漆黒OB		17.7		12.2	1.5	3.0	0.5	E-5-16			0.00	C	199	剥離面残	
石歯	漆黒OB		16.5		11.4	1.4	2.9	0.4	B△1-2			5.5	0.33	C	200	
石歯	漆黒OB		18.0	※	13.0	1.4	3.0	0.4	A△4-37		片脚	5.5	0.31	C	201	
石歯	漆黒OB		16.8		12.4	1.4	2.4	0.4	E-7-6			0.00	C	202		
石歯	漆黒OB		22.6		15.7	1.4	2.5	0.8	E-4-45			0.00	C	203	剥離面残	
石歯	漆黒OB		22.4	※	16.0	1.4	3.7	0.7	F-5-20		片脚	5	0.22	C	204	
石歯	AN							B-7-16		左半分					C	
石歯	黒OB		16.5	※	11.5	1.4	3.0		B-3-47		片脚	5.5	0.33	C		
石歯	OB		16.1	※	12.5	1.3	2.5		B-6-3		片脚	4.5	0.28	C		

石器	AN					E-0-6 B△7-20	両面	左半分以上 先端と片側		C?	
石器	灰縞OB									C?	
石器	AN(SN)	23.3	17.8	1.3	4.3	1.2	D△2-21		1.5	0.06	他 205 失敗品?
石器	赤縞OB	20.7	6.0	3.5	3.2	0.3	B△10-7	両面	0	0.06	他 206
石器	灰質頁岩	-	-						上半分	5.5	他 207
石器	漆黒OB				4.2	0.4	C△9-3	不明	両側		他 208 火を受ける
石器	AN(SN)		17.1		2.5		C-7-96	両面	上半部		
石器	漆黒OB						C-7-50		下半部		
石器	漆黒OB				2.3		C-6-18		山脚		剥離面残
石器	漆黒OB						E-6-33		上半分		剥離面残
石器	漆黒OB						E-4-47		下半分以上		
石器	漆黒OB						A△7-40		下半分		剥離面残
石器	透明OB				1.2		E-8-14		断片		
石器	漆黒OB	27.3	22.5	1.2	5.8	3.7	C-2区			209	失敗品
石器	青灰OB	31.5	26.1	1.5	8.3	7.0	D△4-47			210	失敗品
石器	漆黒OB	23.3	15.1	1.1	4.2	1.2	F843			211	失敗品
石器	漆黒OB	22.4	20.6	1.0	7.4	2.3	D-8-3			212	失敗品
石器	青灰OB	21.7	22.3	1.3	7.1	2.8	B-3-11			213	失敗品
石器	漆黒OB	20.5	15.8	1.3	6.3	1.4	C-6-1			214	失敗品
石器	漆黒OB	20.0	15.7	1.2	4.9	1.3	D△6-6			215	失敗品
石器	漆黒OB	16.0	13.0	2.3	3.4	0.8	D-3区			216	失敗品
石器	漆黒OB	27.9	12.2		5.2	1.5	E△2区			217	失敗品

表9 掘載石器一覧（石器を除く）

器種	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出土区No.	図 No.	素 材
ポイント	AN	(23.3)	16.1	3.4	(1.4)	C-6-1	218	
ポイント	AN	(31.4)	14.6	7.9	(2.8)	SK116	219	
ポイント	AN	36.1	14.2	3.6	2.1	B△1-4	220	
ポイント	AN	61.6	14.5	5.9	6.2	B△6-1	221	両面
ポイント	AN	(40.2)	14.7	5.2	4.1	B-3-2	222	
ポイント	AN	(36.7)	12.7	6.1	(3.2)	D-4-39	223	
ポイント	AN	45.1	19.8	3.9	3.9	B-7-1	224	
ポイント	OB	52.3	27.1	17.0	16	D-5-1	225	
ポイント	AN	(82.9)	14.5	8.1	11.4		226	片面
ポイント	AN	(45.1)	(23.0)	(8.8)	(10.6)	C△2-13	227	両面
スライバー	AN	54.4	24.8	6.9	9.4	A-2-37	228	
スライバー	OB	47.3	28.1	8.7	9.8	D△4-55	229	
スライバー	AN	41.2	20.0	5.7	5.5	B△7-9	230	
スライバー	頁岩	76.5	32.2	10.3	30.5	C△3-60	231	
スライバー	AN	61.1	34.6	17.4	31.5	SK117-23	232	
スライバー	AN	37.4	11.4	8.1	3.1	E-0-10	233	
石核	AN	58.7	29.0	11.8	20.6	C△7-34	234	
石核	OB	40.9	37.4	18.2	27.2	E△3-41	235	
石核	AN	41.6	31.3	10.5	14.3	A△9-23	236	
石核	OB	35.2	19.4	7.4	6.2	D-4-39	237	
UF	OB	40.2	11.2	3.2	1.6	D△1-1	238	
UF	OB	47.2	16.8	9.1	4.3	E-42-10	239	
加工	OB	26.0	19.1	6.6	2.8	D-4-103	240	
器種	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出土区No.	図 No.	
磨石	花崗岩	7.5	5.5	4.7	272	B△9-67	241	
磨石	花崗岩	10.0	7.8	4.3	596	C△8-50	242	
磨石	花崗岩	12.1	11.4	7.2	1358	D△5-28	243	
石皿	花崗岩	22.8	21.5	6.5	-	B△10区	244	
石皿	花崗岩	18.5	17.5	8.0	-	B-3区	245	
石皿	花崗岩	15.9	13.4	6.2	-	B-6-30	246	
石皿	花崗岩	27.4	20.5	10.5	-	C△3区	247	
石皿	花崗岩	12.8	8.3	4.1	-	D-5区	248	



①



②



③



④



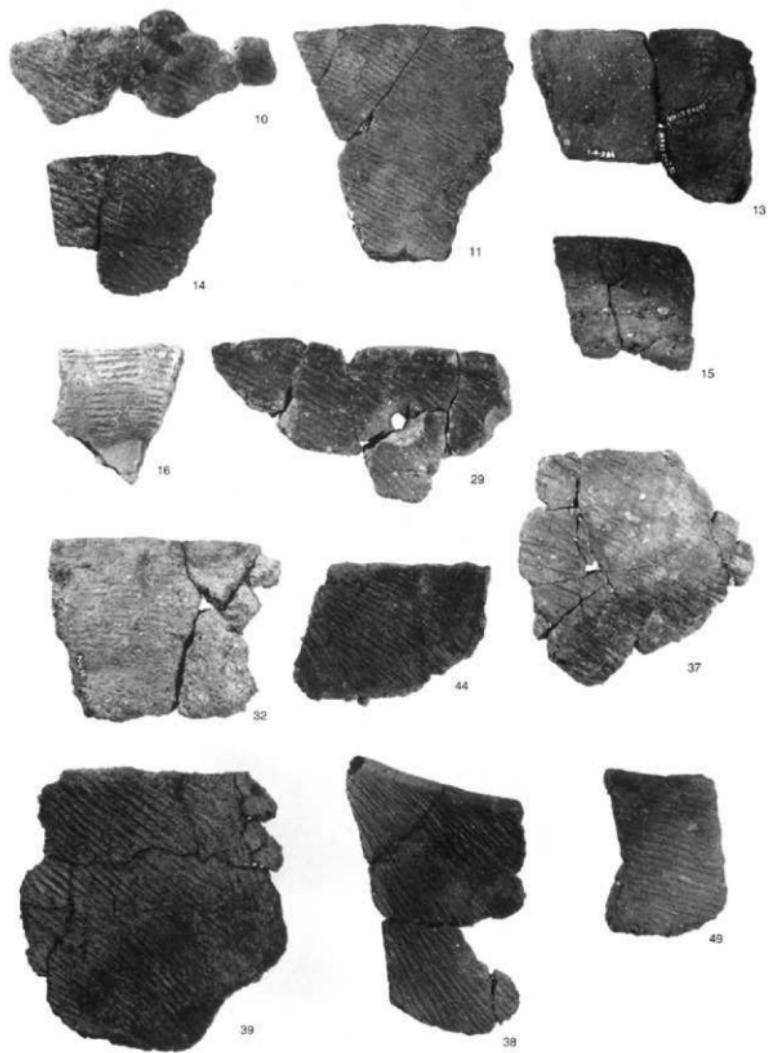
⑤

図版1 主要検出遺構と出土土器1

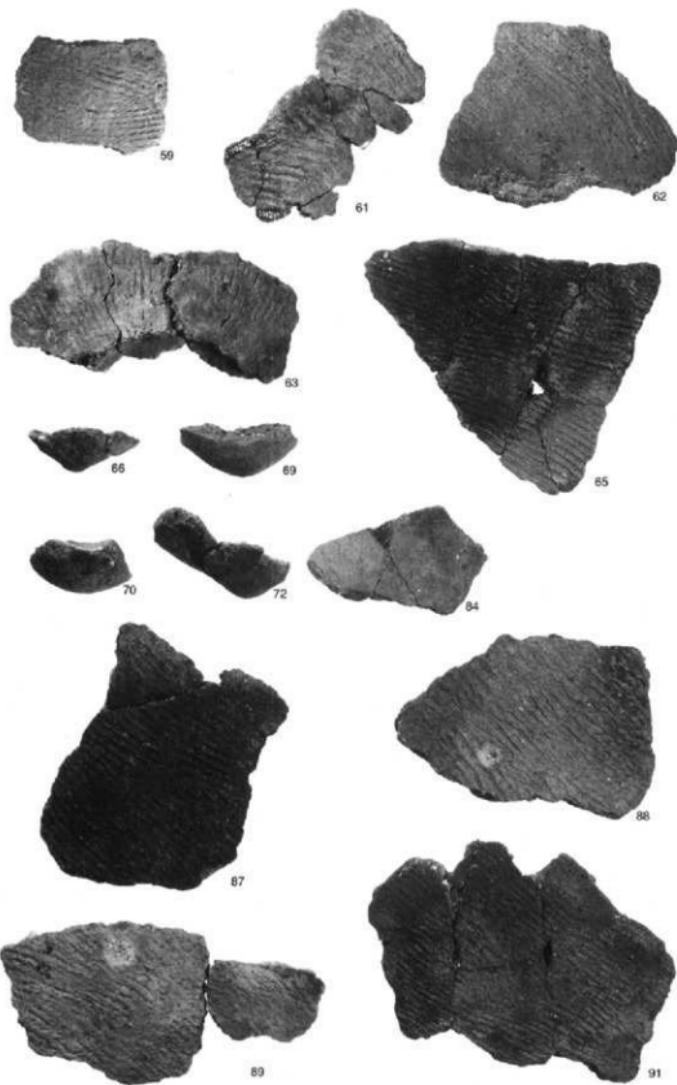
①土層断面 ②調査状況 ③SX101 ④B-3K遺物出土状況 ⑤B-3K出土遺物 (図6-3)



圖版2 出土土器 2



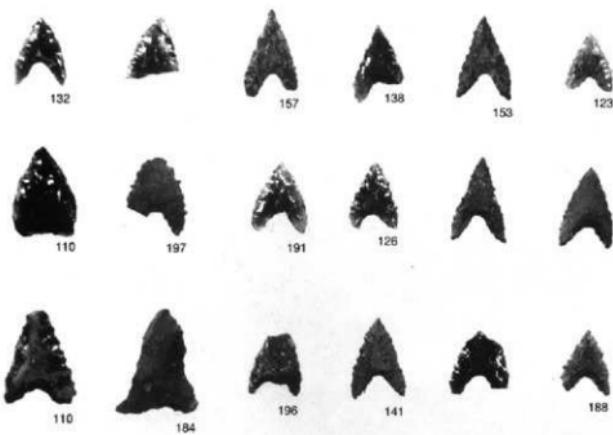
圖版3 出土土器 3



図版4 出土土器4



図版5 出土石器 1



圖版6 出土石器2



235



229



240



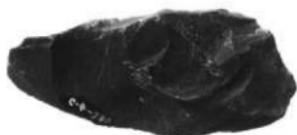
230



220



236



237



231



232

図版7 出土石器 3

松木田遺跡群 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 686 集

2001年 3月30日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 有限会社光文堂

